
聖☆マイヤー・ハイスクール魔法学科の始末書。

みっち～6画

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖☆マイヤー・ハイスクール魔法学科の始末書。

【Nコード】

N1356N

【作者名】

みっちゝ6画

【あらすじ】

学園の理事長が逃亡！？ 山積みになった仕事はどうするの？
焼き芋虫の駆除剤の購入？ 反省室の模様替え？ フラミンゴスパイ団って何？ 孫だからって、あたしに押し付けないでよねっ！
魔法学科の試験も近いのに、時間がない！！ こうなったら、マーカー！ アンタの出番よっつっ！

？特務のお仕事！

五月三日。

グリーンアッシュの短髪をなびかせて、ミシエル・マイヤーは階段の踊り場から思い切りよく飛び降りた。

「ちょっと待ったあ！ まだこのあたしがいるってこと、忘れないでくださいよお！」

ひゆるうり反転したミシエルは、虹色のステンドグラスに日がさすのを見た。ターンを決めてぴたりと降り立ち、「はっはっは！」悪役張りの笑い声を響かせて仁王立ちになる。

「僭越ながら、このぼくのことね」

ミシエルの後ろから、黒髪のマーキーも顔を出す。ふたりはそろいの白ブレザーの制服を着込み、その上ミシエルは、首に黒リボンのチョーカーを巻き付けていた。

眼前には、おびえた目をした金の髪の少女。着ている制服の作りは同じだが、その色合いは落ち着いた緑色をしていた。

あとひと足で、長い、長い階段を下りきることができようかというところ。

その深い海色のひとみに、じわりと涙の粒がにじむ。彼女は手にしていた朱色の万年筆を、そっとスカートのポケットに押し込もうとした。

「むだだよ」

ひやりと言い放ったのは、マーキーだった。

「もう逃げられない。観念してもらおう。どうあがいても……キミの負けだ」

マーキーは、むぞうさに小さな手帳を取り出した。その手首にも黒のリボンが巻かれている。彼はおびえる少女の胸ポケットに、チエリーピンクのラインが二本入っているのを、ちらと確認した。

「さて、と。二年のクロエだね。今日の違反で、すでに六度目。も

う見過ごすことはできないな。かわいそうだけれども、行ってもらうことになる。反省室にね」

手慣れたしぐさでさらさらと書き付けるマーキーの背後に、ばたと男たちが走り寄る。彼らもまたそろいの白ブレザー姿。マーキーの前にぴちりと居並び、キヲツケをした。

「申し訳ありません！」

尋常でない量の汗をぬぐい、彼らは息を止めてマーキーの様子をうかがう。

「今さら追いついても、もう遅い。彼女は、ぼくたちが捕まえてしまったからね。キミたちも特務を名のるのならば、もう少しまじめに仕事をしてもらわないと困るのだけれど」

「すみません！」

いまいましげにクロエの顔をのぞき見て、男らはマーキーに何度も頭を下げる。

「もういいんじゃない？ 結局、違反者は捕まえたんだしね」

満足げにほほ笑むと、ミシエルは青い顔をしているクロエの手を取った。

「おじい様の所まで、あたしが連れてくよ。いいよね？」

「待って、ぼくもいっしょに……」

マーキーは手帳から顔を上げた。

「ミシエルだけじゃ心もとない。……キミたちはパトロールを続けてくれ」

あとのコトバは、居並ぶ男たちに向けられたものだった。ミシエルは、くすりと忍び笑う。

「やだ、あたしひとりで連れて行けるよ」

「だめだ。前の案件を忘れたのかい？ 最後の最後でキミが……そうだよ！ もう杖は取り上げたのかい？」

「えっ？ マーキーがやってくれたんじゃないの？」
はっと、ふたりは振り返る。

——遅かった。

クロエは、「万年筆」のペン先をふたりに向けていた。そのほっそりとした指が、細かく震えている。

「ごめんなさい。でも時間がないの。帰ったらどんな罰でも受けます。だから、今だけ見逃して。このまま行かせてちょうだい」

そう白な顔のまま、彼女は身を沈ませた。

「水と精霊の名において……私クロエが唱えます。出でよ、水竜ツインウォーター！ この場のすべてを洗い流したまえ！」

ミシエルの足は、根が生えたかのように動かない。

「伏せるんだ！」

マーキーは短く叫び、続けさま真白のブレザージャケットの内側に手を突っ込んだ。すぐさま引き抜かれたその手には、黒光りする時計がはめられている。

その腕をきっちりと前方に突き出して、彼はあらんかぎりの声を張り上げた。

「天と精霊の名においてマーキーが唱える！ 雷の竜騎士、心弱き者の技を打ち破れ！」

ミシエルは目を閉じた。体が沸き立つような奇妙な感覚のあとに、すさまじいごう音が頭上を過ぎていく。

前へ、前へと体が吸い寄せられる。両の足をしっかりと開いて、なんとか踏みとどまった。

やがて、温かい手が肩に置かれたのを感じ、ミシエルは目を開ける。

「……クロエは？」

廊下の先まで見通したが、彼女の姿はない。マーキーは答えずに、割れた窓ガラスをあごで指した。

「逃げた。ツインウォーターはオトリだったようだね」

「追うの？」

ふん、とマーキーは鼻を鳴らす。

「当然。竜騎士は決して獲物を逃がさない」

きやあああ！ 天をつくかん高い声が響いた。

「手かげん、したんでしょね」

「もちろん」

ミシエルは疑わしげにマーキーの整った顔を見つめ、これで性格が良かったらもっと人気がでるのにね、とため息をついた。

？不合理主義の憂うつ？

特務……特別警戒任務隊。たいそうな名前がついているが、いわゆる風紀委員のことだ。

ミシエルとマーキーは、共にセントラルパークにあるセント・マイヤー・ハイスchoolの、伝統ある魔法学科の生徒なのだ。

「何かあったのかしら？」

ひそひそ通り過ぎる生徒らは、皆クロエ同様、緑色のブレザーを着込んでいた。

「違反者が捕まったのよ。二年生らしいわ」

その中でミシエルたちの白ブレザーは堂々と、いや……異様に、目立っていた。

こんな目立ってしまったては、仕事にならないのではないのか。そういう提言をことごとく無視して、今なお白ブレザーの特務が活動しているのは、単に彼らの趣味に他ならない。

理事長の孫娘でもあるミシエル・マイヤーは、無類の目立ちたがり屋だ。魔法学科を選んだのも、「魔法がど派手でカッコいい！」からだと言っている。

冷静な顔立ちが印象的なマーキー・デイリーは、ミシエルのイトコの幼なじみの隣に住んでいたおじさんの弟の再婚相手の連れ子で……とにかくミシエルの親友だ。

共にこの春、普通科の中等部を卒業したばかり。今ではハイスchoolの魔法学科一年に籍を置く、数少ない幸運な身の上なのだ。

「クロエはどうなるの？」

言いながら、ミシエルはうす暗い反省室のドアを思い浮かべた。

「もちろん入れられることになるだろうね、反省室に。……そんな顔しないでほしいな。彼女のような違反者を野放しにはできないだろう？ それとも……」

マーキーは、目だけをミシエルに向けた。

「まさかこのぼくが、好きこのんでこんなことをやっていると思っ
思っているのかい」

——どうかしら？

ミシエルは、ぴくりとまゆを寄せた。時々、違反者を捕らえる術
が強すぎるのではないかと思えるのだ。

「とにかく、あたしはおじい様に報告に行くよ。違反者は捕らえま
したって」

早くその場を離れてしまいたかった。

割られた窓ガラスを無遠慮に乗り越え、特務のメンバーが中庭に
出て行くのが見えたのだ。きつと、これからクロエが引きずられて
現れるのだろう。

「あとでぼくもうかがいますと、伝えておいてくれるかい？ 今日
のチェスでは負けません、ともね」

マーキーが後ろ姿のまま、コトバを投げてよこした。

「……はいはい。分かったわ。じゃあね！」

ステンドグラスの大回廊に続く扉を押しながら、後ろ手に大きく
腕を振る。

もともと、午後の授業はサボるつもりでいたミシエルだった。こ
のまま祖父の部屋に行けば、もってこいの時間つぶしになる。

チャララリ〜ラッ♪

からっぽの大回廊に、昼休みの終わりを告げるオルゴールが鳴り
響いた。

これは、ミシエルが幼稚舎にいたところに遊びで作った曲で、それ
はそれは評判が悪い。

「早く普通のチャイムに戻してよー！」

何度そう願い出ようとも、祖父はにこりと笑ってこれがいいのだ
と譲らない。

カン・ゴン・ボン♪

理事長室の扉は「不合理主義の憂うつ」と名づけられた芸術家の
作品で、普通にノックをしてもおかしい音になる。ミシエルには理

解できないが、変わったものに目がない祖父にとっては、またない貴重な扉なのだった。

「おじい様？ ミシエルです」

ネクタイピンを外しながら、扉の前に立つ。上着の白ブレザーも脱いで、肩に担ぐ。

……まだ開かない。

「おじい様？」

ミシエルは胸ポケットから、輝く石のはめられた指輪を引っ張り出す。

ミシエルのきゃしゃな関節をするりと通った指輪は、まるで初めからそこにあったかのようにして、中指の根元に収まった。

「風と精霊の名において、私ミシエルが唱えよう。いたずらゴブリン兄弟、閉ざされし扉を開きたまえ！」

ぴん、と張り詰めていた糸が切れたかのような音が響く。次いで、古びた「不合理主義の憂うつ」は、やけにのろのろと動き出した。

「おじい様？ おじい様？ どこに……」

顔だけ出して呼んでみるも、返事はない。

はた、と何かに思い当たったミシエルは突如として走り出し、両手を宙に掲げた。

「……やられた！」ミシエルは叫ぶ。

執務デスクの上で、祖父の書き置きを見つけたのだ。

『愛する我が孫娘ミシエル。わしは、しばらく旅に出ることにする。あとのことは任せたぞ。マーキー君の言うことをよく聞いて、勉強も怠ることのないように』

「信じられない！」

ミシエルは天に向かって、雄叫びを上げる。

「またまた、またまた、お忍び旅行なの？ このあたしを置いて？」
ミシエルが頭を抱えて座り込んだ、まさにその時。

カン・ゴン・ボン♪

「理事長？」

声の主は、おそらくクロエを反省室に押し込めたあとここに直行したのだろうマーカーだ。ミシエルは、ため息をついてよろよろと立ち上がり、デスクのボタンを押した。

がりがりがり。ちゃっちらん♪

「……やだ、この音」ミシエルは半ばあきれ顔で、マーカーを出迎えた。

？逃亡リズム。

「では、また出ていったっていうのかい？」

マーキーは切れ長の目もとを、憂うつそうにゆがませた。

「もうすぐぼくらの、魔法学科の中間試験もあるっていうのに？」

ミシエルは押し黙ったまま、またたきもせずにマーキーを見つめていた。

「……分かったよ。なんでもする。だから、そんな顔で見つめるのはやめてくれ」

言いながら、マーキーはポケットから愛用の時計を取り出した。

冷酷非道な天下のマーキーも、ことミシエルが関わりとまるで弱い。仕方ないな、などつぶやきながら肩に手を置く姿は、優しさに満ちあふれて……見えないこともない。

「まずパパたちに知らせるべきかしらね」

「やめた方がいいな。マイヤー夫妻は、理事長の放浪癖にいつもお怒りだったろう？」

マーキーは、にたりと口角をつり上げた。

「面倒なことにならないためにも、今回は伏せておいたほうがいいのかも知れないな」

マーキーは少しばかり攻撃多寡で残酷趣味などところがあるけれども、頭がいい。彼の言うとおりにしておけば、「最悪よりはまだまだ」程度に治まるだろう。

もちろん「最悪」はミシエル本人が取り仕切った場合、である。残念なことに、これはすでに実証済みの事実だった。

「見て、この書類」

ミシエルは、執務デスクの上に広げられていたぶ厚いメモに目を落とす。

「五月三日、今日だね。えー、フラスコ市長との食事会？ メンドくさそうだからパス！ 次は、焼き芋虫の駆除剤の購入？ これな

らできるけど……本当に必要なのかな？」

「深く考えるな、困らせようと書き残しただけかも知れないぞ」

「そうね。えくと、四日。反省室の模様替え……」

「なに？」やけに反応の早い、マーキー。彼は違反者を反省室に閉じ込めるのが、何よりも好きなのだ。

「なんだって？ 他になんて書いてある？ ちょっと見せて！」

「いいじゃない。あんなうす暗くてじめじめしたところなんか、なくなっても」

「だめだ！ ああ、なんという悲劇！ どういうふうに模様替えをする気だったのだ？ あの変態ジイサンの……いや、その、多趣味な理事長のことだ、きつと……」

マーキーは、あたふたとじたんだを踏んだ。

「それじゃあ明日、いっしょに立ち会ってみたらどう？ 気に入らなかつたらすぐにとり止めにしてもらえばいいじゃない？」

「そうだな」マーキーは真顔になった。そのあとは、いつもの冷静さを取り戻そうと咳払いをして呼吸を整えている。

「えーっと……四日。まだあるよ？ フラミンゴ、ス、スパイ団の尋問？ 何それ？」

ふん、とマーキーは鼻先であざ笑った。

「それはいい、ぼくがやるから」

「……五日。ラジスター氏との面会。これって、あのクロエのお父様よね？」

先ほど「捕獲」された魔法学科二年のクロエは、町工場を営んでいるラジスター氏の息女なのだ。

「――クロエは？」

気にかかっていたことだ。普段、走る姿さえ人前で披露したことのない穏やかな性格の彼女が、特務に魔法を仕掛けるとは。

「理由もなく規則を破ったりはしないと思うんだけど」

「それじゃあミシェルは、理由さえあれば規則を破ってもいいとも言ってくれるのかい」

ミシエルはコトバに詰まる。

「どこに向かおうとしていたのかわかって。あのせっぱ詰った様子は普通じゃなかったし」

「ミシエル、聞くんだ」

こつん、と軽い音を立て、マーキーは額を寄せてきた。

「魔法学科には、こと細やかな規則がたくさんある。最終学年に上がって試験をクリアしなければ、教室から『杖』を持ち出してはいけないというのも、そのひとつだ」

「でも、あたしたちはまだ一年だけれど……持ち歩いてるじゃない？」

ミシエルの指には、琥珀色のきゃしゃな指輪が収まったままだ。

マーキーは、かりかりと額をかいた。

「そりゃあ、ぼくたちが特務のメンバーだからさ。いざっていうときに身につけていないと、違反者を取り締まれない。分かるだろう」
じゃあ、とマーキーは理事長の革張りのイスに腰を掛けた。

「魔法学科と言っても、別にぼくら自身に魔法の力があるわけじゃない。ここまではいいね？」マーキーは薄く笑った。

「学園創設以来、受け継がれてきているこの『杖』さえあれば、だれでも強力な魔法を使うことができる。この世に多大な影響を及ぼすことも、可能だ。『杖』とは、使い方次第でどうとでもなる、恐ろしいもののさ。だから、ぼくたちがいるんだ」

特務のメンバーには、それぞれ自分の好みに合わせた「杖」が支給される。ミシエルは、琥珀色の「指輪」を選んだ。マーキーはさんざん迷ったあげく、無機質な「腕時計」を使うこと決めた。

特務ではないクロエの持ち出した杖は、授業で使う大量生産型の「万年筆」だった。片手に収まる小さなそれは、持ち出す気になればいくらでもできてしまう恐ろしいものだ。

クロエも、その誘惑に負けてしまった。彼女はいったい、何のために杖を使うつもりだったのだろうか。

「彼女のことはもう忘れるんだ。これからどれだけ忙しくなると思

うんだい？」

「……ごめん」

「謝ることじゃない。いいかい？」

指にはめた琥珀の指輪に日の光を当てながら、ミシエルはうなずく。

「理事長の代理をしっかりと務め、試験もクリアする。それが、今は一番大切なことだよ」

？防災扉と隠し部屋♪

五月四日。

夜色の髪をふわりとさせて、マーキー・デイリーは中庭の一角を見下ろすかっこうで参考書に目を落としていた。

彩り豊かな花を飾った、テーブルの群れ。学食代わりのカフェの中、マーキーの周りにはだれも座っていない。かと言ってほかに客がいないのではなく、彼の読書のじゃまにならない距離は制服姿で埋まっていた。

きちりと両の腕を組み、凜とした風ぼうの彼は、まさに理事長代理にふさわしい。実際の身分は単なる一年生に過ぎないが、その威厳と風格は……いや、その横柄な物言いと柄の悪いコワモテの風ぼうは、教師陣にさえ一目置かれる存在なのだ。

ミシエルは、ずいぶん遠くからその姿を見つけていたが、彼のほうは一向に気づいていない。

「マーキー、お待たせっ」

「遅いぞ」

彼は魔法学科の分厚い参考書を、音を立てて閉じた。すでに彼の腕には、「杖」である時計がはめられている。

「ママから電話がかかってきたのよ。おじい様が失踪したこと、ごまかすのに時間かかったちゃった」

「それで？」

「もちろん、うまくごまかしておいたわ」ミシエルは得意気に胸を張る。

「マーキーは何してたの？　もしかして……また勉強？」

当然、とマーキーはうなずいた。

「試験をパスするには、まだまだ足りないくらいだからね」

「はいはい。一番で、でしょう？　マーキーはこの世の何よりも勉強が好きなのよね」

ミシエルの声音には、わずかにトゲが含まれていた。

「何を怒っているんだい？」

「別に」

否定したものの、ミシエルのトゲには理由があった。

昨日の午後のこと。理事長代理を務めることに決めたふたりは、焼き芋虫なるものの正体を調べるために図書室に向かうことに決まっていた。

理事長室を出ようとした、まさにその時。祖父を訪ねてフランスコ市長がやってきた。事情を知った彼は、祖父の代わりとばかりにふたりをレストランに、ら致……いや、招待したのだ。

マーキーは困り顔のミシエルを放って、ずいぶんと上機嫌に市長との会話を楽しんでいた。夕べの光景をまざまざと思い返し、ミシエルはまゆ根を寄せる。

「そんな顔をしないでくれ。杖に絶対回数があるって分かっただけでも、大収穫じゃないか」

「そうかしら？」

「そうだよ！ 市長の話は最高さ！ 絶対回数の話なんて、ぼくは初めて聞いた。授業では、そんなこと、ひと言も教えてはくれなかったろう？ 杖には限界がある。それを超えると壊れる運命に……」

マーキーはコブシを高く突き上げた。

「はいはい」

マーキーは再び参考書を開き、その目次をばらばらめくる。

「ちよっと先に行行っててくれないか？ ぼくもすぐに追うから」

「えっ？ 行かないの、図書室」

すぐに行くからと念を押したマーキーは、「きっと試験に出るに違いない」と、何度もつぶやきながら走り去った。

「あとで来てよ、絶対に！」

取り残されたミシエルは、しぶしぶ中庭を後にする。

チャララリッラッ♪

一時限目の始まりを告げるオルゴールを背に、教室とは正反対の

らせん階段を上った。その先のステンドグラスを越えると、ガラス張りの図書室がある。

ミシエルは、入り口に備え付けられた回転バーを押して中に入った。

「あら、ミシエル」カウンターの奥で、司書のマルコが顔を上げた。

「授業は？ またサボリなの？」

言いながら、彼女は静かにほほ笑んでいる。

「ひっひっひっ」

ミシエルもまた肩で笑って、そのままカウンターを通り過ぎる。

マルコは手元に籐かごを引き寄せて、かちりと白い札を入れた。

その中を、ミシエルはちらと目視で確認する。オレンジの札が、ふたつ。青がひとつ。これはそのまま、現在、図書室を利用している人数とその学科を表しているのだ。

中等部はオレンジの札。高等部の普通科は青。魔法学科は赤。その中でも特務のメンバーは、白というふうに決まっていた。

ミシエルは、仕切りのついた個人机のスペースを急いで通り抜けた。そこでは、中等部らしき少年と高等部の普通科の少女とが、忙しそうに百貨辞典のページをめくっていた。

辺りをうかがう。他にもうひとりいるはずの「青」が、どこにも見当たらないのだ。

「書棚の影にでもいるのかな」

ミシエルは肩をすくめ、足を速める。柱に沿って進み、壁に突き当たった所で、しゃがみ込んだ。

目の前には、古い鉄の扉がある。

防災扉と明示されてはいるが、ここは祖父の作った隠し部屋なのだ。ミシエルはそっと、埋め込み式の取っ手をつまむ。

シャンシャンシャン♪

とたんに鳴り響く音にもめげず、ミシエルはそのまま強く扉を押した。

?ニセモノ★

古い時代の香りがほのかに漂う。ここは、古書ばかりが収められている書庫。

隠し扉の裏にあるのだから、もちろん一般には立ち入り禁止の間だ。それでも、呪が施してあるわけでもなんともない。そのため、その存在を知る者には簡単に進入できる中途半端な隠し部屋なのだ。「スイッチは……と」

壁沿いに手を滑らせる。その手が、生温かい何かに触れた。

「きゃあ!」叫ぶと同時に、反射的に指を強く押して明かりをつけるのも忘れない。切れ長の目が、こちらを見ている。

「なんだあ、マーキー? 早かったじゃない。びっくりさせないでよ!」

マーキーは何も言わずに、黙って片まゆをぴくり、と動かしした。

「どうやって先に着いたの?」

「あの、ボク……違います、けど?」最後に、ぴよこりと小首をかしげる。

よくよく考えると、あのマーキーがこんなに穏やかに話をするはずがない。その上、彼はマーキーよりもずっと小柄な体格をしている。

「ボクはレオンといいます」

夜色の髪のリオンは、マーキーに良く似た面ざしで礼儀正しくお辞儀した。

「ごめん、マーキーによく似ていたから」

——ずいぶん前に、本物のマーキーから注意されたことがあった。「気をつける。特務以外の者がここに入るのを見たら、すぐに知らせるんだ。違反者として確保しなければならぬからね」

ミシエルは、どうしたものかと首をかしげる。彼はおそらく「青」

——中等部の人間だ。

「あの、ボク……」

レオンの目が、ミシエルの首に巻かれた黒リボンのチョーカーで止まった。特務、と小さく声が漏れる。

彼が逃げるようであれば、追いかけて捕まえるのに後ろめたさを感じることはない。だが、彼は動かない。沈黙がどさりと落ちてきて、そのまま居座ってしまったかのようだ。低い天井に取り付けられた蛍光灯が、ぴかぴかと忙しそうにまたたいている。

「あの……」レオンが、意を決したように口を開いた。「ボクは今、ある問題で困っていて、ここに来ればすべてが分かると、ある人に言われて……」

様子を見よう、とミシエルは決めた。こんなにマーキーに似ている者を、反省室になど入れたくはない。

「あたしは、焼き芋虫について調べるのよ」

「えっ……」レオンは顔を上げた。「焼き芋虫ですか」

「知ってるの？」

「姉さんが同じものを探していました。変わった名前だなと思ったので、覚えて……」

「お姉さん、いるんだ」

「ええ、クロエといいます」

クロエ・ラジスター。ミシエルの脳裏には、マーキーに追い詰められ、おびえて「杖」をかざした彼女の姿がくつきりとよみがえる。

「クロエは……」

「はい。しばらく反省室に入ることになりました。知っていらっしゃると思いますが」

きびきびとした口調で、レオンは続ける。

「ボクは、姉さんの待遇のことで、あなた方にとにかく言うつもりはありません」

色素の濃いひとみで、宙を見やるレオン。ミシエルは、わずかにまゆをひそめた。

「ねえ、レオン？　あなた、クロエが何をしようとしていたのか……知っているの？」

「いいえ、でもきつとロクなことではないのでしょうか。あいつ、マーキーが関わっているのですから」

「ねえ」唐突に出てきたその名に、ミシエルは目を見張る。「クロエがそう言ったの？」

「このところ姉さんはずっとふさぎこんでいて……悪いと思ったのですが、日記を見たのです。そこにはマーキーの名前といっしょに焼き芋虫の購入、と書かれてありました」

ミシエルとマーキーとの付き合いは、ふたりが中等部で同じクラスになったときから始まった。しかし、それ以前の彼のことを、ミシエルは何も知らない。

「あなたのお姉さんとマーキーって、どんなつながりがあるの？」

いや、とミシエルは首を振る。「その前に、あなたはマーキーの何？」

「ボクたちは……」

レオンのコトバは、突如として現れたまばゆい光と大音響に阻まれて、うまく聞き取ることはできなかった。

「おしゃべりはそこまでだ」

冷たい響きを含ませて、やけに高圧的な物言いをする声の主は。

「言ったろ？　ここは一般には立ち入り禁止の場。なぜ、すぐに捕獲しなかったんだい」

激しく燃え立つ彼のひとみは、まるで憎しみにゆがんでいるかのように見える。

マーキーは、そのまま「時計」を構え、口の中で何やら唱え始めた。

「待ってよ」

問答無用に腕を振り下ろす、マーキー。

「天と精霊の名においてマーキーが唱える。雷の竜騎士……」

威嚇するかのように、緩慢に身を沈ませるマーキー。構えた「時

計」は、ぴたりとその照準をレオンに合わせている。

「この哀れな心弱き者を、闇へと誘え！」

瞬間、ぴりりと空気が震えた。

「闇？ どうして最大呪文なんて……！」

この狭い空間の支配者は、まさしくマーキーだった。彼は、その強大な力でレオンを圧倒し、余す力は宙を漂った。

？図書館ドミノ↓↓↓

「やめて！」

ミシエルは、その身をかき抱くようにして、しゃがみ込む。体が沸き立つように震え、宙に引き込まれそうになるのを必死でこらえた。

「どうしてここまでする必要があるのよ！」

——こんなの、マーキーじゃない。

ミシエルは一気に腕を突き出すと、琥珀の指輪に集中した。

「風と精霊の名において、私ミシエルが唱えよう！　いたずらゴ布林兄弟、正気をなくした彼の者を捕らえよ！」

しなやかに肢体をのけぞらせたミシエルは、竜騎士の最後の余波をかわす。

「くうっ！」

反転して天を仰いだミシエルの額から、汗が散った。琥珀色の光が、交互にマーキーを取り巻いていく。げんそうにミシエルを一瞥すると、マーキーは時計をはめた腕をぬるりと伸ばした。

「もうっ、ばかマーキー！　おとなしくあたしに捕らわれなさいっ！」

ゴブリンの光の触手が、次々とマーキーの四肢を絡め取る。

自由を奪われたマーキーが、最後まで伸ばしていた利き腕をようやく地上に向けたのは、ミシエルが術をかけ始めてからきっちり三十分も経ってからだった。

「なんのつもりだい？　ミシエル」

ゆったりと唇をなめ取ったマーキーは、難しい顔を作って宙をにらみ据えている。眉間に寄せた深いシワには、嫌悪の念がにじみ出ている。

「それはこっちの台詞だわ。なんのつもりよ、ばかマーキー！」

ミシエルは立ち上がり、真白の制服に付いたほこりを払った。

「一応……聞いておきたいんだけど？　もしかして、あたし、に竜騎士を向けた？」

カツカツ靴音をさせて歩み寄ったミシエルは、するりとマーキーのアゴ先に指を這わせる。

「こっち見て！」床にはつくばったレオンが、ごきゆり、とノドを鳴らした。

「あら？　いいのよ、別に。そんな時計なんて、何個でも付けられればいいわ。あたしは別に……気にしないから」

マーキーは、ゴブリンの支配下のない左手で時計を外し、白制服の胸ポケットにするりとしまい込んだ。

「君が、特務の仕事を忘れて、違反者と語らっていたんじゃないか」
マーキーは、アゴ先をきっちりミシエルに捕らえられたまま反論する。

「違反なんてしていませんよ、ボクは」

レオンの声に、マーキーの怒りの炎が再燃する。ミシエルの術によって自由になるのは、左の腕一本だけだという状態で、マーキーは竜騎士を発動させた。

「天と精霊の名においてマーキーが唱える」

「ちよっと待ってよ、マーキー！」

ミシエルひとりの力では、学園一の術の使い手マーキーは止められない。それまでマーキーを取り巻いていた捕縛のゴブリンが、宙にかき消えていく。

「雷の竜騎士、理に反した者を無力化せよ！」

ミシエルは琥珀の指輪を構え、反射的に防御の呪文を唱えようとした。

「待って、このままじゃ……きゃあああああああ！」

何か重たいものがミシエルの上に折り重なる。

痛いだとか、苦しいだとか、そういうことを考える余裕さえなく、ミシエルは何かを押しつぶされていく。

どうん、ごうん、と工事現場の重機のような音が響き、そのたび

にミシエルは息が詰まりそうになってむせ返る。

「ちよつとあたしを助けなさいよ、マーキーいいいい！」

声に出すことができたのか、それとも心の中で叫んだのか。

目を開けると、折り重なった書棚の最上部で、ミシエルはマーキーに抱えられていた。

「びっくりした……まるでドミノ倒しね」

見渡すかぎり、本の山を取り散らかした書棚。その最後のひとつが、今まさに倒れ込むところだった。

めまいがするほどの大音響がしたのと、ぜんまい仕掛けのように、レオンが飛び上がったのは、ほぼ同時だった。

「良かった、無事だったのね」

あんどするミシエルをよそに、マーキーは高い位置から、床に伏せたままのレオンを見下ろす。

「レオン」

「……兄さん」

ぜいぜいと肩を震わせ、レオンは顔を上げた。苦しげな呼吸が、時おり、ひゅう、となった。

「どうした？　ずいぶん苦しそうだな。さあ、兄さんに話してごらん？」

レオンは唇をかむ。

「ねえ、マーキー？」

ミシエルは、ふたりに視線を滑らせながら声をかけた。

「なんだい？　ああ、そうか。紹介がまだだったね。これは中等部に在学中のぼくの弟でね、レオンというんだ」

その居並んだ顔を見れば、確かにその通りだと納得できる。だが、それがこのありさまの説明にはならないはずだ。

「あの女は元気かい？　ぼくと父さんを捨てて出て行った、あの女は」

口にするのも汚らしい、とでもいうかのようにマーキーは吐き捨てる。目を細め、遠い記憶に身を震わせながら。

?*ファミリア*

「母さんは……元気にしているよ」

レオンは目を伏せたまま、弱々しくつぶやいた。

ああそうか、とミシエルは目をそらす。確かに聞いたことがあった。マーキーには、離婚した母が連れて行った弟がいるのだ、と。

両親の離婚と、再婚。マーキーの弟レオンがクロエを姉と呼んだ裏には、そんな事情も隠されている。記憶の中の彼は、自分の家族の話題にはいつでもコトバをにごしていた。

「ちよっと、君たち。そこで何をしてるの」

ふいに遠くから女の声がして、ミシエルは飛び上がった。姿はまだ見えないが、そのさばさばとした声音はきつと司書のマルコだろう。

まずいことになった、とミシエルの顔はみるみる青ざめて色を失っていった。

普段は穏やかなマルコだが、館内で騒ぎ立てるヤカラにはそれ相應の制裁を与える人物として定評がある。前に、特務のメンバーを反省室送りにしたこともあると聞いていた。

「なんでもないわよ!」

慌てたミシエルは、不自然にも声が裏返った。

「だめだ!」「待ってください!」

マーキーとレオンが、そっくりの声音で叫びながらミシエルの口に手を当てる。

「それじゃあ、何かあるって自白しているようなものだぞ」

マーキーもレオンも争うのをやめて身動きひとつせず、じっと一方を見つめている。カツ、コツ、カツ。高いヒールが床を打つ。

「なんでもないってことは……」声は次第に大きく響いてくる。

「……ないでしょう? ものすごい音がしたわよ。まさかあなたたち、こんな狭いところで魔法を使っただんじゃないでしょうね」

散乱した書物の山からぬらりと顔を出したのは、やはりマルコだった。

「やってくれたわね」

大げさに両手で口を覆い、上目遣いに一同を見やって仁王立ちになる。

「違うの、ちよっと手違いがあってね……って、やっぱり、だめ？ あーん、マルコ。お願いだから、見逃してっ！」

「そうねー。まずはこの倒れ付した書棚をすべて元に戻して、書籍の破損リストを作ってくれるかしら。そうしたら、言い訳でもなんでも聞くわよ」

にこり、とほほ笑むその穏やかな顔にだまされてはならない。彼女は言ったのだ。聞くわよ、と。

「聞くだけ？」

「うまい言い訳でも考えておくことね。さあ、マーキー君も、レオン君も、立ちなさい」

驚いたことに、ふたりともやけに素直に立ち上がった。なにやら揃って赤い顔でもじもじしている。

「さあ、力を合わせて！」ぱんぱん、と両手を打ち鳴らしたマルコは、扉の奥へと颯爽と戻っていった。

シャンシャンシャンシャン♪

「どうするう？」

ミシエルは、散々に倒れ付した書棚の山を見やった。

「まるで……ドミノ倒しね。テレビなんかでやってるやつ、ふふふ」テレビでは撤収の場面などまるで映さない。そもそも書棚を使っただとしても、中に本など収まっていけないはず。今までの緊迫した空気が払拭されたことには感謝するが、マルコの課した仕事には相当の時間がかかりそうだ。

「焼き芋虫、調べたかったのに」

「面倒だな」ちっと舌打ちして、マーキーがぼやく。

「自分でやったんでしょう。こっちはいい迷惑よ」

言いながらも、ミシエルの顔は笑っていた。

棚を持ち上げるだけでも、ふたりがかりの重労働だ。ひとつ目の棚と格闘しながら、ミシエルはしびれる指先をわななかせる。

「もうやだぁー！」

お手上げ状態で、両手をバンザイさせた。

「ねえ、マーキー。使っちゃダメなの？」

ミシエルは、指輪のはめられた指をひらひらさせる。

「そうか！」

そのときの、マーキーのうれしそうな顔。唇の一端をつり上げて、にたり笑う。

「よし、ぼくが……」

「待って。だめよ、あたしがやるわ。今のマーキーは正気じゃないもん」

利き手をぐんと前に突き出して、ミシエルは念入りに呪文を唱えた。どうか、どうか、助けてくださいと強く念じながら。

「風と精霊の名において、私ミシエルが唱えよう！　いたずらゴブリン兄弟、倒れた棚を起こしてちょうだい！」

ふわり、と軽やかな風が吹き、書棚に命が宿る。次々と自ら起立していくさまは、まるで早戻しのVTRのようだ。

「やったねっ。これで元通り。あたし、魔法学科に入って本当に良かったよー」

「そんなことでいちいち感激していたら、指輪があきれて魔力の源を貸してくれなくなるぞ」

悪態をつくマーキーも、普段どおりの冷静さを取り戻している。

「さあさあ。すぐに本を入れて、マルコを呼んでこよう」

複雑そうな顔で、冷たい壁に寄りかかっていたレオンに、ミシエルは声をかけた。

「ちゃんと最後まで付き合うのよ。連帯責任なんだから」

はい、と消え入りそうな小さな声が返る。

マーキーは後ろ姿のまま、腕時計をかざして本を元の位置に戻し

て
いた。

？←特務が反省←

魔法を使っても、それらをすべてやり遂げるには昼休みまでの時間を目いっぱい使ってしまった。ミシエルは整然と片付いた書棚を満足そうに眺めて、両手を上げる。

「あたし、もうここにいるの嫌よ」

ふたりにも、これといった依存はなさそうだ。古い時代においては、新鮮な外界の空気をたつぷりと吸い込みたい。

シャンシャンシャン♪

隠し扉をくぐると、司書のマルコがひとりの生徒を前に息巻いていた。

「約束は守るためにあるのよ。無理だと思ったら、最初からそう言えばいいの」

しかられた生徒はしょんぼりと目を伏せている。ミシエルは自分の姿を重ね見て、ため息を取り落とした。

「ねえ……あれやったのは、マーキーよねえ。それじゃあ、報告は任せたよ！」

形のいい眉をつり上げたマーキーは反論しようと口を開けたが、それよりもすばやくミシエルは書棚の影に滑り込む。

「あら、終わったのね」

マルコは整った顔をくるりと向けた。しかられていた生徒は、これ幸いとばかりに逃げ出す体勢を取る。

「ミシエルとレオン君も、隠れていないでこっちに来なさい」

「全部、言い付けどおりにできました。もう、解放してくださいさるのでしょうか？」

マルコは「ちょっと待ってね」と言い置くと、防災扉の奥に消えた。やがて不思議なほほ笑みを浮かべて戻ってくると、三人を手招きする。

「終わったって言っても、ただ書棚を起こしただけみたいね」

マルコは明らかに、三人の仕事ぶりに不満を抱いている。

「でも、ちゃんと本も元に戻しましたよ！」ミシエルは慌てて叫んだ。

「……だめよ。まだ、破損リストができていないもの」

「忘れてた」ミシエルはのんきに笑ったが、マルコの顔はにこりともしない。

「やっぱり、このまま済ませるわけにはいかないわね」

カウンターの下から分厚い生徒名簿を引っ張り出したマルコは、丹念にページをめくる。

「それって……まさか……」マーキーが後ずさりした。

「ええ、そのとおりよ」

言いながら、マルコは人差し指をぐんとマーキーに向けた。

「マーキー君？ 図書室で魔法は使わないことって、前にも言ったわよね？」

はあ、とマーキーは目をそらす。

「特務のメンバーか……でも仕方ないわね。大人はみんなに平等に接する必要があるの。レオン君も合わせて、三人とも反省室で一晩過ごしていらっしゃい」

そのときのマーキーの愕然とした顔といったら、おそらくミシエルが知る中で最もくずれ、見るに耐えないものだった。

ぽん。ぽむ。ぽん。壁ぎわから響く軽い音。まるで野球少年のキヤッチボールの音にも似ているが、実際にはマーキー・デイリーのいらだちからくる八つ当たりのこぶしの音だ。

「座ったら？ マーキー」

ミシエルの声に、マーキーは例えようのない微妙な表情で振り返った。唇をかみしめすぎて、その色はわずかにうっ血して変色している。

「気持ちとは分かるけどさあ……」

「分からない！」ミシエルの声に重ねて、マーキーは叫んだ。

辺りには、興味本位でのぞき込んでくるヤカラが群れを成している。

「分からないよ、ミシエルにはね。なぜもつと強く反論しなかったんだい。なぜ、ぼくたちまでがこんなところに入らなければならないんだい。信じられない。いいや、信じるものか」

顔色、悪すぎ。ミシエルは、ぽりぽりと額をかいた。確かに、反省室はここ何日間かの強化取締りの成果もあり、たくさんの生徒であふれかえていた。

それらのほとんどを自らの手で捕らえていたマーキーには、居心地が悪くて当然だろう。

「でもさ、仕方ないよ。あんなところで、あれだけの強力魔法を使っただから。それにマルコの口ぶりだと、前にもあそこで騒いだことあるんでしょう？ 違う？」

今まで難なく特務の仕事をこなしてきたミシエルだが、反省室の中に入るのは初めてだった。陰気で暗い場所だと勝手に思い込んでいたのだが、これだけの人であふれているとその印象も薄い。

「意外に……扉の奥は広かったんだねえ」

「そうさ」と、マーキー。彼の任務は違反者を反省室に閉じ込めることであって、まちがっても自らが入ることではない。

「またまた予定が狂っちゃったねえ。でもさ、模様替えはここで見学できるから、別に構わないよね」

ミシエルの声に、マーキーはさらに落胆した様子で、頭を抱えた。「……そうだね……」ひどく疲れきった声音だった。

「模様替えのあとは、フラミンゴスパイ団なんていうのにも会わなきゃならなかったのに。でも、それは無理ね。ここに来てもらうわけにはいかないもの」

マーキーは不満げに、取り上げられた腕時計の跡をさすっている。「明日こそ、予定どおりに進められるようにがんばろうね」

ミシエルの声に、マーキーは「出られたらね」と低い声で返す。

「ここを出るには理事長のハンコが必要なんだよ、ミシエル」

「だったら問題ないじゃない？ マルコには悪いけど、さっさとここを出ようよ」

ミシエルは笑ったが、無理だよ、とマーキーは大げさに嘆いてみせた。

「理事長は、お留守だろう。ぼくたち代理がふたりともここにいないのに、いったいだれがハンコを押してくれるっていうんだい」

？桃色ウエイブ？

「……持ってきてもらえばいいんじゃないの？」

「無理だよ。反省室に入ったら最後、外からの持ち込みは一切できないことになっている。例外は許されない。今、ハンコを持たないばかりは、ここにいる烏合の衆となんら変わりはないんだよ。……規則だからね」

「ウソおん」ミシエルは、ぽかんと口を開く。

「だったらいいよな」

このままだと、気ままな祖父の帰りを待つほかに、外に出る手立てはないことになる。

「待って、待つのよ！　きつと、何か方法があるはずなんだから……あ！」

ミシエルとマーキーの視線ががち合う。

「ああ、それしかない。脱出、だ」

規則を守らせるべき側の人間であるはずの、特別警戒任務隊。その中核ともいうべきミシエルとマーキーが、反省室からの脱出を試みるのだ。

「ハンコさえあればいい。理事長室までたどり着いてしまえばなんとかなるのだからね」

押し黙って考え込むマーキーを置いて、ミシエルは反省室の全景を眺めやった。

奥の暗がりには、固まった一団がいる。男が五人、女が三人。車座になった彼らの表情までは分からない。金の頭のひとりが、ふわりと振り返った。

「あつ、クロエ」

それは、昨日マーキーに捕らえられた二年のクロエ・ラジスターだった。捕獲される際の、あの涙に潤んだひとみが思い返される。ずっとミシエルの背後で小さくなっていたレオンが飛び出して、

クロエの横に座った。早口に何事かまくし立てている。

（マーキーの悪口、言ってなきやいいんだけどな）

ミシエルが苦笑したとき、ふいに反省室の扉が開いた。

「はいはい、注目うー。みんな、おとなしく端っこに集まるようにい」

まばゆい光を受けて仁王立ちになっているのは、目深にニット帽をかぶった男だった。

「だれだい？」

マーキーは、まゆ根を寄せてミシエルに問う。

「えっと……模様替えの業者さん、かな？」

オレンジ色のニット帽には、走るラクダのワッペンがはり付いている。

「ラクダ印の模様替え♪って、おじい様が歌っていたのを覚えているもの。ねえ、あいさつに行こうよ。あたしたち、おじい様の代理なのよ？」

マーキーは露骨に嫌そうな顔を見せた。ニット帽の男は、はでな柄シャツの胸ポケットから、とがった形のサングラスを取り出している。

「こんにちはあ。理事長代理のミシエル・マイヤーです。あいにく祖父は留守にしております。……模様替えのことは聞いていますから。どうぞ、始めてください」

ミシエルがほほ笑むと、男はふんふんと何度もうなずきながら腕を組んだ。

「いやあ、理事長室におじゃましたんすけど、だあれもいなかったでねえ。事務室も職員室もカラッカラだったし、やけに生徒も少ないなあ……なんて思ってたんでスよお。ここにいたんですねえ……こおんなに」男は、にやりと口角をつり上げた。

「わざわざこんなところで待っていてもらっちゃうなんて、申し訳ないなあ」

「あっ、いえいえいえ。ちょうどあたしたち、反省室に入れられち

やいましてえ」

えへへへ、ゆるく笑うミシエルの前に、男は深々と片ひざを付いた。絵本の中の王子様がやるように、ゆったりと手のひらを差し出す。

思わず手を重ねるミシエルに、男は声のトーンを落としてささやいた。

「ところで、ですね。俺様、偽者なんですヨ」

「はあ」ミシエルは生返事。

「嫌だなー。そこはもっと、大きさに驚きを表現してもらいたいところだなあ」

彼はおもむろに立ち上がり、ニット帽にはり付いたラクダのワッペンをペリペリとはいでしまった。その下には、蛍光ピンクのフラミンゴが顔をのぞかせている。

「だとしたらあなたは、いったい何者だと言うのですかっつ」

今度はご期待にそえるよう、芝居がかった口調でミシエルは問う。

「……フラミンゴスパイ団でーす？」

男は両手を水平に伸ばし、片足を持ち上げ、にたりと口角をゆがめた。

マーキーが音もなく近づいて、ミシエルの背後から声を出す。

「ミシエル、ばかがうつるぞ」

ムツと口をとがらせて、フラミンゴ男はニット帽を脱ぎ捨てた。

耳元には、きらりと赤いピアスが輝いている。

マーキーは胸ポケットに手をやって、すぐに杖がないことに気がついた。

「くくく。そんな丸腰でどうするってえの？　ちなみに俺様は持ってます」

蛍光どピンクに染められた髪をかき上げ、ピアスを強調する。

「それがあんたの杖なのね。なんでマルコは、あたしたちからまで杖を取り上げたのよっ！」

わななくミシエルをよそに、マーキーはずんずんフラミンゴ男に

近づいていく。桃色の羽をあしらった襟元に手を伸ばすと、いとも簡単に宙に舞い上げる。

「うわああああああ？」

マーキー・デイリーは、中等部では柔道部に在籍していたのだった。

「ちょっとなにそれ、聞いてないヨ。カンベンしてよ」

もごもごと不平を漏らすと、フラミンゴ男はやつのことで立ち上がる。

「あんたら、魔法学科の生徒なんだろう？　だったらちゃんと魔法、使いなヨ。まったく、イマドキの若者は、セオリーってもんを無視しやがる。とんでもねえな」

男は再び両手を反らせ、無意味にフラミンゴのポーズを取った。安心しろ、とマーキーが笑う。

「まちがいない。こいつ、あほだ」

? イメージパズル+

ミシエルはなだめるようにマーキーの肩をたたき、男に向き直った。

「あの、お兄さん？ あなたはいったい何をしにここに来たんですか？」

反省室にいる全ての人間が、こくりとうなづく。

「聞きたいですか、聞きたいですか。ならば語ってあげましょう。俺様は……」

彼が口を開きかけた瞬間、マーキーの重いこぶしがそのみぞおちに決まった。

「うぎぎぎぎ」歯を食いしばってうめいた男は、やがてキリリと顔を上げる。

「おまえーっ、話の途中だろうがヨ。お願いだから、最後まで言わせなさい！」

ああ、ついをお願いしちゃったよこの人、とミシエルは頭をかく。

「遠慮願おう。ぼくは今、そんなに暇ではないのでね」

身体をくの字に折り曲げながら、それでもフラミング男の口は止まらない。

「ヒマそうに見えるけど？ だって、反省中なんでショウ？」

「それは別にぼくたちのせいでは……」マーキーは、激しく口元をわななかせる。

いやいやいや、とミシエルは片手を上げて割って入った。

「それは自業自得でもんでしょう？ とぼっちりはあたしのほうなんだからね！」

へええ、とフラミング男は細い目元をさらに細めた。

「女の子に迷惑かけるなんて、ワルイ男だね。俺様が退治してあげようか？」

「結構です」

ミシエルが首を振ると、男は「まあまあ、そう言わずに」とニセモノの笑みを浮かべた。みたびポーズを決めたフラミンゴ男は、髪をかき上げピアスをむき出しにする。

「行くよ！俺様の魔法。受け止められないと思ったら、早めによけちゃってねえ」

はいっ、と両手をたたいて胸の前で合わせると、そのままの体勢で呪文を唱える。

「えーっと、地と精霊の名において？ 俺様マイケルが唱えるぜ！

かわいいかわいい芋虫ちゃん、こんがり焼けてから出ておいで？」

「妙な呪文、唱えないでよ！ 力が抜けちゃうじゃないのよ！」

ミシエルは身もだえしながら、叫んだ。実際、足がくすぐつたい。ミシエルが何気に目を落とすと、無数の芋虫が足を這い上がってくるどころだった。

「なにこれ！」

しかもこんがり焼けている。

「かわいいいいい……だろ？ 俺様の、大事な大事な焼き芋虫」

——焼き芋虫の駆除剤の購入。祖父のリストに、そうあった。確かに、あった。

「最悪！ 至上最低の凶悪魔法だわっ！」

そうよそうよっつ、と反省室じゅうの女子から声があがる。

「いや、ミシエル。それほどのことでもない……ぞ？」

小さくつぶやいたマーキーは、そのままフラミンゴ男に向き直った。

「おい、マイケル。おまえひとりで来たのか」

「……えっ、ああ？ うん、そうだけど？」

フラミンゴ男は、妙に冷静なマーキーをいぶかしげに見やった。

「なあ、なんで俺様の名前知ってるの？」

「自分で言ったら、今」

なるほど、と思い当たったらしい自称フラミンゴスパイ団、本名マイケルは納得顔で額をかいた。

「まあ、お譲ちゃんたちは置いて、俺様とおまえとで決着をつけようぜ？」

一方のミシェルはといえば、這い回る芋虫こんがりを前に絶叫&悲鳴のオンパレードだった。

「嫌いな、嫌いな、こういう足がいつぱいの、嫌いな」

涙目になってよろよろと窓際まで逃げたミシェルに、すっと手が差し出された。

「大丈夫ですか？」おっとりした声音で心配そうにミシェルをのぞき込んでいるのは、クロエ・ラジスターだった。

「こんなおぞましい呪文を唱えるなんて、最低ですわ」

まゆ根を寄せた顔もまた、整っていてキレイだとミシェルは思う。「これを見てください」

レオンの声が背後から聞こえて、ミシェルは何気に振り返った。

「なあに？　って、……いやああああああ！」

焼き芋虫を大量に抱えたレオンが、驚愕のひとみでミシェルを見上げている。

「なに考えてるのよ！」

瞬間的に、ミシェルは胸ポケットに手をやった。杖はマルコに取り上げられていた上に、その現場を目の前で見ているはずというのに、レオンはのけぞって身を縮ませる。

「レオン」

冷静なクロエにうながされ、ようやく目を開けたレオンは、おずおずと声を張った。

「焼き芋虫って、なんだかやけにおいしそうな匂いがするなあって思ってたんです」

「やめてよっっっ！」

反射的に怒鳴ったミシェルだったが、鼻をぴくぴくさせたあと、目を泳がせる。

「ちよっと……いや、かなり……おいしそう？」

「ですよね」

こんがりほどよく、ほくほくに焼けた秋の味覚。

焼き・芋虫なのか。焼き芋・虫なのか。

「でもでもでも、だめよ！」

恐ろしいものでも見るような目で、ミシェルは身を震わせた。

「だって、焼き・芋虫のほうだったらどうするの！」

クロエとレオンは顔を見合わせる。

「だれも食べるなんて言っていない……ですよね？」

ふたりをよそに、ミシェルは食い入るように「それ」を見つめていた。いつまでも、いつまでも。

？屋敷町の攻防ッ！！

マーキー・デイリーは、扉の前に追いつめられていた。

「くつくつくつ、オシマイだあねえ。さあ、ドウスルの？ 魔法学

科一の秀才君は、追いつめられたらどうでのの？ 教えてヨ」

じりじりと間合いを詰めてくるフラミンゴ男は、にんまりと満足そうに笑う。

「うるさいぞ、マイケル」

「マイケル言うな」

ピンクの羽をあしらったフラミンゴ男は、ピアスむき出しのまま叫んだ。

「……まあったく、なんてフテブテシイ餓鬼なんだ。気に入らねえええ」

唇の端をなめ取ると、フラミンゴ男はまたも呪文を唱える体勢に入る。

「地と精霊の名において？ 俺様マイケルが唱えるぜ！ かわいいかわいい……ぐふう」

マーキーの手刀が、フラミンゴ男の首筋をかすめた。

「だからさあ、魔法学科の生徒なんだろ？ 魔法を使えって、魔法をー。ああ、そっか。杖を取り上げられたんだっけ？ あはは」

いくらマーキーが柔道の使い手といっても、魔法を駆使するフラミンゴ男とは間合いが違う。みるみるうちに、床は降り積もる焼き芋虫で足の踏み場もなくなった。

「まったく、忌々しい術だな」

「どんどん行くより、はいっ」調子に乗ったフラミンゴ男は、さらに髪をかき上げる。

「……かわいいかわいい芋虫ちゃん、こんがり焼けてから……って、あれ？ 出てこない。詰まっちゃったのかなあ」

目を泳がせるフラミンゴ男を前に、ここぞとばかりにマーキーが

間合いを詰める。

「なあんてね？」

フラミンゴ男は、マーキーの鼻先で意地の悪い笑みを浮かべた。
「地と精霊の名において、俺様マイケルが唱えるぜ？ 愛しいハニ
ー、稲妻のような激しい衝撃を見せてやろうぜ？」

反省室の床を覆っていた焼き芋虫の大群が、金色に光り始めた。
マーキーはいぶかしげに辺りをうかがう。

「ミシエル！ 気を付けろ！ こいつ何か……」

幼なじみを気づかって振り仰いだマーキーの口が、止まる。

「ちよ、待ってヨ。あんた……」フラミンゴ男も大げさに口元を覆った。

「熱いよ……マーキーい」

涙目のまま、幼なじみの姿を探すミシエル。

「ちよっ、まさかお嬢ちゃん。それ……食ったのか？」

答えることもできずに、ミシエルは口元を覆う。焼き芋虫＋ミシエルは細かく身を震わせ、やがてびりびりと放電し始めた。

「ああゝあ。勢いあまってソレ食った人、初めてだヨ。びっくりだ」
コトバとは裏腹に満足そうなフラミンゴ男は、水平に伸ばした指先をくるくる振った。

「水と精霊の名において、私クロエが唱えます。出でよ、水龍ツイ
ンウォーター！ 悪しき者どもを洗い流したまえ！」

凜とした声音が響いた。双頭の龍が現れ、大量の水を吐き出しながら焼き芋虫で覆われた床を洗い流していく。溢れる流れは、いとも簡単に反省室の扉をなぎ倒した。

「クロエ!？」

焼き芋虫はそのまま、廊下へと流れ出ていく。仁王立ちになったまま万年筆をかざし続けるクロエを、ミシエルは足元から見上げていた。

「ごめんなさい。私が持ち出した杖は……ひとつではありませんでした。でも、こうして役に立ったのですから、お許しくださいま

せね」

悪びれなくほほ笑んで見せるクロエの元に、マーキーが走り込む。

「よくやった！」

そのまま通り抜けて、扉をくぐっていく。どこに行くの、とミシエルは声を上げた。

「追うのさ。当然だろう？」

フラミンゴ男は軽々とした足取りでコンクリートを走り抜け、石畳に飛び出していく。

「そこで待つんだ、ミシエル。それ……どんな副作用があるのか分からないだろう」

それでもミシエルはふらふらとそのあとを追い、見かねたマーキーが途中で引き返してきた。

「ごめんマーキーい。でも、置いていかないで……」

分かった、とうなずきながら、マーキーはクロエに向き直る。

「おい、杖」

万年筆のキャップを締め直しながら、クロエはくすりと笑う。

「危ないところでしたわ。あと少し遅かったら、ツインウォーターの水流に乗って、焼き芋虫の電流がまき散らされるところでしたもの」

引きつった笑みを浮かべマーキーは「そうだな」と、細かく何度もうなずいた。

「行こうか」

学園の門の先には、すぐに通称「屋敷町」と呼ばれる区域が広がる。企業家たちの絢爛豪華な屋敷が並ぶさまは圧巻で、その名の由来にもなっている。

「どこだ？」マーキーは、いきり立って目をさまよわせた。

「ここだよ」

フラミンゴ男は、ご丁寧にも最も高い塔の天辺でポーズを決めている。くによりくにより、とよろめきながら。

「……無理するな。今、楽にしてやる」

クロエから受け取った万年筆をかざし、マーキーは呪文を唱える構えに入る。

「天と精霊の名においてマーキーが唱える。雷の竜騎士、忌々しき者の呪を打ち破れ」

「やる気なの？　なら俺様も行くよ。地と精霊の名において？

俺様マイケルが唱えるぜ！　愛しいハニー、本物の雷撃がどういふものか餓鬼どもに見せ付けてやろうぜい？」

視線がかち合った。マーキーは一步も引く気もなく、万年筆を掲げ続けた。

？中間試験。。。 (のヒミツ)

五月五日。

ミシエルが時計に目を落とすと、すでに日付が変わっていた。マーキーは振りかざした万年筆で竜騎士を呼び寄せ、対するフラミンゴ男も合間を縫っては、くによりくによりと雷電を撃ち込んでくる。「下がったほうがいいですわ」背後に駆け寄ったクロエが、ミシエルに腕を伸ばした。

「クロエは……どうして、杖を持ち出したの？」

制服の胸ポケットに目をやりながら、ミシエルは詰問する。

「必要だから、ですわ。現に今こうして役に立っているではありませんか。それはそうと、ミシエル。図書室での調べ物は片づきましたの？」

——日記。

「焼き芋虫の駆除剤の購入。ちゃんとできていたら、こんな大がかりな立ち回りはしなくてもすんだのじゃなくて？」

唇をかむ、ミシエル。じわりとにじむ血の味に、ぶるりと身を震わせた。

「ミシエル！ なに突っ立てるんだ！」

ハッとしたミシエルはクロエとレオンの腕を取り、建物の影に引きずり込んだ。

「話はあとよ。あたしたち、今は特務の仕事が最優先なの」

クロエは静かにほほ笑んだまま、片まゆだけを器用に持ち上げてみせた。

屋根に踏ん張ったマーキーは、フラミンゴ男と対峙している。

「アンタさあ、けっこうしぶといよねえ……でもさあ、気づいてる？」フラミンゴ男は、口角をゆがめた。「さっきよりずっとずっと、呪文の精度が落ちてるよ？」

——杖の絶対回数。マーキーは、市長との会食で得た情報を脳裏

によりがえらせる。

「これ以上むやみに打てば……不利、か」

頭の中で情報と打算とをめぐらせていたマーキーは、フラミンゴ男に体を向けた。

「何の目的があつてここに潜入したのだ、おまえは」やけに高圧的な物言いをする。

「……へえ、そう。なかなかいい作戦だねえ。挑発して頭に血を上らせ、呪文を連発させる。冷静さを欠いている場合は、精度が落ちるってね……へへ」

フラミンゴ男は、ぺろりと舌を出して唇を湿らせた。

「お見通しダヨ。大量生産型だからネ、それ。ねえ、いいこと教えようか。絶対回数ってさ、こうやって振ると……少しだけ延長されるんだよね」

なじみのフラミンゴポーズを決め、屋根の上でバランスを取る。よくよく見ると、杖であるピ阿斯を付けた耳を器用に回している。

「つまりい、アンタの場合はね、このポーズをしたまま万年筆を回せばいいのヨ」

「そんな道化のようなマネができるか！」マーキーの顔がそう白になる。

「A H A H A H A H A ! 別にやれなんて言っていないよおう？ やられたら俺様、困っちゃうものゝ。ね？」

マーキーは屋根の下に陣取っているミシエルらに頼りなげな視線をちろりと送る。会話の聞こえないミシエルは、無責任に「大丈夫よ！」とコブシを振り上げて見せた。

「なんだろう、さっきから呪文が止まったままだわ」

屋根の様子をうかがいながら、ミシエルは伸びをする。

「……えっ、どうして？ フラミンゴスパイ団って、人を操る呪文まで使えるの？」

ミシエルにうながされたクロエとレオンは、屋敷町の絢爛豪華な

屋根の上で壮麗なるポーズをキープするマーキーの姿を目撃することになった。

「……兄さん……」レオンが膝を折って絶句する。

両手を水平に伸ばし片足を上げ、バランスを取りながらも万年筆の先をくるくる回す。

「なにあれ。……魔法少女？」ミシエルはすばやく視線をそらす。げらげら屋根をすべり降りてきたフラミンゴ男は、ミシエルとクロエの間に降り立った。

「ねえ、理事長代理のミシエルちゃん」

嫌悪を込めた視線を送ると、フラミンゴ男は「コワイ、コワイ」と首をすくめた。

「どう思います？」フラミンゴ男の影で、だれかが言った。ミシエルは首をめぐらせる。

「……クロエ？」

フラミンゴ男の腕に細い指先をからませたクロエ・ラジスターは、口元に優美な笑みをたたえたまま、勝ち誇ったようにミシエルに向き直る。

「まあ、不合格だな」ぽりぽり頭をかきながら、フラミンゴ男は目を細めた。

「あそこまで素直に敵の誘導にハマるなんて、思いもしませんでしたわ」

フラミンゴ男にもたれかかるクロエの姿は、やけに親しげだ。その後ろで、ぽかりと口を開けて固まっているレオンが見えて、ミシエルは状況がのみ込めていないのは自分だけではないのだと安心する。

「なんなの？」ミシエルの問いに、フラミンゴ男はせせら笑った。「試験だよ、中間試験。魔法学科で普通のペーパーテストなんかするワケないデショ？」

ミシエルの脳裏に、この三日間のあらゆる事象が洪水となって渦巻いた。

「おじい様も、グルなのね」

「あたりまえ！ それより、もうポーズはいいから降りてこいよって秀才君に言ってくれる？　なんかサ、恥ずかしさのあまり何も聞こえませ〜ん状態に陥ってるみたいだから」

フラミンゴ男とクロエは、互いに見つめ合って、くすくす笑っている。

「伝統なのですわ、こういう形式の試験。わたくしも去年は見事にやられましたもの」

ため息を取り落としたミシェルは、唇をかみしめながら屋根の上を振り仰いだ。深夜というのに、屋敷町には学園のチャイムが鳴り響いている。試験終了の合図なのだろう。

チャララリ〜ラッ♪

不合格だと知ったときのマーキーの反応を思えば、このままポーズを決めさせておいたほうがいいかも知れない。勝手に判断したミシェルは、マーキーには声をかけずに学園に向かって歩き始める。混乱したままの頭で、追試もこんなふうにだまされるのだけはカンベンしてほしいなあ……などとミシェルは思っていた。星のまたたく、ある夜のこと。

？落第生のため息……

ダラン♪ 試験期間が終わり、学園のチャイムも新たに変更された。

「おじい様の趣味って、ちょっと分からないなあ」

真白のブレザーの胸元をかき合わせ、ミシエルはため息を取り落とす。

「少し短すぎるな、チャイムにしては」

「そういう問題じゃあ、ないのよ」

隣に並んで座るマーキーに反論し、ミシエルは首を振る。

「チャイムだけじゃないの、どうしてあたしたちが毎日毎日、貴重な時間を削って補習を受けなきゃならないのってことでしょ！」

「ああ」考えたくもないといったふうに目をそらすマーキーは、このところ元気がない。机に広げた参考書の山に取り組んだまま、ミシエルのコトバには上の空だ。

この一週間、ふたりは補習に追われる日々を送っている。そもそも実技試験の補習が筆記というのも不満だが、それよりもっと重要な問題がふたりの前に横たわっていた。

補習が終わるまでという条件付きで、杖は取り上げられたままの状態なのだ。杖がなければ特務の仕事もできない。そういうわけでふたり——魔法学科でふたりきりの落第生——は、心置きなく休み時間も放課後も、こうして補習に取り組むことができるのだ。

「チガウ、チガウ！ ちっがうっつ！ あたしたち、なに大人しく言うこと聞いているのって話！ あんな試験、そもそも無効でしょう？」

グリーンアッシュの短髪を激しく振り乱したミシエルは、マーキーのネクタイを引っ張り上げた。

「ほかのクラスメイトなんか、すっつごく簡単で単純でぬらうとした実技試験だったって聞いたわよ！ 不公平よ、違う？」

「……言うな」

「おじい様ったら、絶対に楽しんでるのよ。そういう人だもの！
あたし、抗議してくる。いっしょに行こうよ、マーキー。あんなフ
ラミンゴ男みたいなピンクの変態にあたしたちが振り回されるなん
て、おかしいのよ」

「……言うなって」

ミシエルはマーキーの机に両手を載せて、不機嫌にばんばんたた
き付けた。

「ああ、思い出しても腹が立つ！ あたしなんて、あれからずつ
と静電気体質になっちゃて、何を触るのでもコワイんだからっ」

「もう言わないでくれったら！」

マーキーが立ち上がる。コブシを握り、こめかみをぴくぴく震わ
せている。あの夜、たったひとりでポーズを決めていたマーキー。
それに気づいたあとの彼は……そのときの状況を何ひとつ語りたが
らない。

「もうすぐ学園祭よね？」

慌てたミシエルは、すばやく話題を変える。マーキーは、忙しく
参考書を開いたり閉じたり繰り返しながら、そうだね、とようやく
聞き取れるほどの声で返事した。

「毎年、特務のメンバーで出し物をするって話、聞してる？」

「へえ……」そのまま、マーキーはため息を取り落とす。

「杖を持たない特務なんて、特務って言えるのかな」

ふふ、と自嘲したマーキーは、再び参考書の山に埋もれてしまう。
つまらないとばかりに唇をとがらせたミシエルは、すつくと立ち上
がった。

魔法学科の教室は、もったも見晴らしのいい展望室に設けられて
いる。ドーム型の天井に、張り巡らされた円形の窓。そこで、一年
から三年までが時間をずらして代わる代わる授業を受けている。

それ以外の授業は、ほかと同じだ。補習の科目の中に、普通科の
テキストが大量に紛れ込んでいるのも、ミシエルが不満を募らせて

いる原因のひとつだった。

「ミシエル、悪いけど窓を閉めてくれるかい？」マーキーが黒髪をかき上げた。

窓辺に歩み寄ったミシエルは、緑の芝生が植えられた中庭を見下ろす。

——そこに、「彼」がいた。ピンク色の羽をあしらった衿元をかき合わせ、そそくさと回廊を行く影。風が舞うたび、ちろりと見え隠れする赤いピアス。ガラの悪いサングラスが、空を見上げた。

（あいつ！）フラミンゴスパイ団と称して反省室に侵入し、ミシエルとマーキーをだました張本人。そのせいでミシエルは、何を触るでも静電気を恐れるようになった。

（あれからマーキーなんて、すっかり元気なくしちゃったんだからね！）

マーキーは別として、静電気のほうは、どう考えてもミシエルがうかつすぎるために引き起こされた結末だ。

それでも思い込んだら一直線のミシエルは、そのまま展望室を飛び出してフラミンゴ男に抗議に行くことに決めた。マーキーを振り返ったが、彼は大量の教科書の中に埋もれたまま、首をもたげている。

「フラミンゴ男。アイツをおじい様のところまで引っ張っていったって、不合格を取り消してもらうんだからね！」

——マーキーのためにも。

ステンドグラスのはめ込まれた階段を飛ぶように駆け下りていくと、ちょうど回廊から上ってきたピンク色の男とぶつかった。

「待って！」

すぐさま身をかわそうとしたフラミンゴ男の腕を、ミシエルはがっちりとり押さえる。

「話があるのよ、マイケル」

ため息をついて、フラミンゴ男はミシエルを見やった。

「ミシエル・マイヤー。ボク、これから君のおじいちゃんに会う約

束があるんだヨネ？ 手を離してくれないかなあ」

「だめよ」さらに力を込めながら、ミシエルはフラミンゴ男をきつくにらみ据えた。

ダラン♪

短い、短いチャイムが、からっぽの大回廊に響き渡った。

？▲特務の先生▲

疾風、とまでは言わないまでもなかなかのスピードで歩き去っていくフラミンゴ男に追いつき、ミシエルも階段を上っていく。

「待ちなさいよ、ちよつと！」

授業を終えた生徒らが色とりどりの引き戸から飛び出してきて、ミシエルの視界は阻まれた。階段を下りる者上る者でこった返し、ミシエルのターゲットの姿も埋もれていく。

急ごうにも人波にせき止められ、うまく進むことができない。

「あつ！ ごめん、通して。……待ちなさい、フラミンゴ！」

踊り場で一度だけ彼は振り返り、ミシエルに白い歯を見せた。

「逃げるな、マイケル！」

額に手を当てるポーズを取ったフラミンゴ男は、大げさに高笑いを響かせて雑踏に消えていく。

周囲の生徒らも、はでな男の立ち居振る舞いに面食らっている者が半数。残りは、また特務の大立ち回りかと呆れている様子だ。

「ちよつと、あいつを止めてよ！」

ミシエルが口を開いた瞬間、紫の引き戸からマーヴェラス先生が姿を見せた。授業を終えたばかり先生は、まだたくさんの資料を抱えている。

「あらん、ミシエル？ どうかしたのかしら？」

「先生！ マーヴェラス先生！ 今ここにピンクの変態が来ませんでしたか？」

「変態なんてどこにもいないわぁん」

紫色のマントを着込んだマーヴェラス先生は、いかにも魔法学科に属しているように見えるが、実際そうではない。歴史を専門としている、普通学科の先生だ。

人波をかき分けて階段を上りきると、廊下には甘い香りが漂っている。

「先生、また香水変えました？」

「あらん、分かるのおん？ ミシエルの嗅覚は動物並ねえ」

「それはまったくほめコトバではありませんよね」

「あらん」

しなを作ってホホホ、と笑うマーヴェラス先生は、これでも立派な男性だ。

「先生」 ミシエルは体ごと、先生に向き直る。

「前にも言いましたけど、もっと男らしくしないとおじい様の印象が、また、下がりますよ。目いっぱい下がると休職になるって、前に言ってますでした？」

「あらん。ミシエルだってもっと女の子らしくしないと、彼氏に見放されちゃうわよん」

ウインクするマーヴェラス先生に「はいはい」と軽く返事をして、ミシエルはそのまま次の階段を上った。

理事長室の入り口の前では、ふたつの影が立ち話をしていた。

「おや、ミシエル」

目尻を下げて孫娘を見やった理事長は、好々爺の様相で笑みを浮かべている。隣には陰気な顔をしたのっぽの男がたたずんでいて、ミシエルは十分な間隔を置いて止まった。

「その方は？」

「病欠で長いこと休職されていた、ガーツ先生だよ」

紹介されたガーツ先生は、顔の半分以上を重たい前髪で隠している。不自然すぎるほど真っ黒に盛り上がった髪に隠れ、まったくその表情がうかがえない。

「今回めでたく……復職されることになってね、今日は挨拶にいらしたんだ。ミシエルや、校舎の案内をしてくれないか」

瞬間。ミシエルだけでなく、ガーツ先生までもが目をむいて無言の抵抗を見せた。構わず理事長は不敵な笑いを残して、部屋の中に消えていく。

「仕方ないわね」

グリーンアッシュの短髪をかき上げて陰気な男に向き直ったミシエルは、「行きましょう」と声をかけた。反応はない。彼はまったくミシエルに体を向けることもなく、つまらなそうに窓辺から中庭を見やっている。

「ガーツ先生？」

すぐに、先程の「仕方ない」が気に食わなかったのだと気づいたが、言ってしまったものは取り消せない。

こんなにも面倒な男とかかわり合いになろうとは、なんて今日は運が悪いのだろう、とミシエルはため息を取り落とす。

「あたしは、ミシエル・マイヤー。理事長の孫です」

孫、の部分をやけに強調して発音した。ぴくりと彼のほおが引きつったのを確認し、ミシエルは歩き始める。思ったとおり、ガーツ先生は大人しく付いてきた。

「先生の教科はなんですか？」

「実技。魔法学科」なんら特徴のない声で、淡々と声を絞り出してくる。

「あたしも魔法学科です！」

思わずミシエルはコブシを突き上げた。それでも、ガーツ先生は反応が鈍い。いら立ったミシエルは、さらに詰め寄るようにして「春から特務のメンバーにも選ばれました」と付け加えた。

「特務？」分厚い黒髪のカートンの奥で、先生の目が光る。この学園での特務の重要性を知っているのなら、一年生という身分でメンバー入りしたことに驚かぬ者などない。

「そうか……」先生は嬉々としてミシエルを見つめ……すぐにそらした。

「いけないな、ウソは」

反論しようとしたミシエルは、杖を身につけていないことに思い当たる。

「今はちよつと理由があるのよ。まあその……謹慎、みたいなの？」

ミシエルのコトバに、吹き出すように咳払いをしたガーツ先生は、「そうかい」と抑揚のない声音を作った。ミシエルはまゆ根を寄せ
る。

（あれ？ この声、どこかで聞いた気がする）

？緊急会議

「そうかい……ふふ、それでは学園祭が楽しみだね」

ガーツ先生は後ろを向いた。咳き込むようにして、背を揺らしている。

——今、笑った？

ミシエルも負けずに前に回り込んでいく。

「いや、すまない。少し風邪気味なんだ」

ぐふんぐふん、とわざとらしく咳をして、ガーツ先生はミシエルの視線をかわした。

「懐かしいな。ぼくも、学生時代は特務を……」

「本当？ 先生、特務のメンバーだったの？」

歓声を上げながら、ミシエルはガーツ先生の腕を引く。

（あれ？）なんだかやけに筋肉質だなあとミシエルは、首をかしげた。陰気な顔をしたのっぽの先生には、まるで似つかわしくない。

「なんだい？」 他にも、不機嫌な声音。

「あ……あのお、先生？ 学園祭での特務の出し物って何をするのですか？」

「劇さ」

「劇？ なんか、すごく……平凡」

そうかな、と再び歩き始めながらガーツ先生はつぶやいた。

「平凡よ。だって、劇でしょ？ そんなの普通科にいてもできることよ。あたし、普通じゃ嫌なのよ。魔法学科に入ったのだって、普通じゃないことがやりたいからよ」

ガーツ先生はミシエルのような案内人などいらぬほど、校舎の中を知り尽くしていた。最上階の魔法学科の展望教室まで、一気に階段を上り詰めていく。

「先生っ！」

気持ちの収まらないミシエルは、教室の引き戸を開けようとして

ミシエルは胸を躍らせてマーキーを振り仰いだ。目元にクマを蓄えたマーキーは、またも参考書の中に身をうずめてしまう。

「先生はこの学園の卒業生で、特務のメンバーだったんだよ」

「へえ」反応はにぶい。

「学園祭の出し物は、劇なんだって」

そう、とだけ声が返る。

（だめだ……）

マーキーを元通りにするには、方法はただひとつ。ミシエルは目を光らせて、後ろにいるはずのガーツ先生を一瞥した。

「劇って何やってもいいんですよね、先生？」

「魔法を披露するのを目的としているのなら、ね」

妙に不安げなそぶりで、ガーツ生は目をそらす。ミシエルのただならぬ勢いに臆したのか、それとも自己防衛本能が働いたのか。

「よっし！ 特務のメンバー、緊急招集よ！」

展望教室から上に伸びたハシゴを上ったミシエルは、特務のメンバーを召集するための大鐘を突く。鳩が群れを成して飛び立ち、学園じゅうに鐘の音が鳴り響いた。

「あの男……よくもノコノコ出てきたものね」

企んだ顔のままミシエルは、ひっひっひ、と高笑う。

時間を置かずに、緊急会議は始まった。意気揚々と劇について意見を交わすメンバーの中にいて、やはりマーキーだけ元気がない。

今までは理事長孫娘ミシエルと、残酷趣味で攻撃多寡なマーキーが中心となっていた特務だったが、予想どおり二年や三年のメンバーからも主役を願う声が上がった。

「構わないよ、ミシエル」

マーキーが後ろ向きな発言をもらす。

「ぼくたちふたりはまだ杖を返してもらっていないのだからね、ふふ」にやり、と口角をゆがめたガーツ先生を盗み見て、ミシエルは密かに決意を燃やす。

「ううん。みんなには悪いけど、主役はマーキーよ。杖なんかなく

「
っても、マーカーなら絶対にやれるもの」

？関係者以外お断りつつ

緊急会議が終わったあとの展望教室に、ミシエルはひとり居残っていた。

「劇に出てほしいの……なんか違うかなあ。うーん、劇に出てください、かな。……それともやっぱり、おじい様に辞令を出してもらって強制的に出させるとか？」

つぶやくように、何度も繰り返す。

がらり、と引き戸が開いて、ひよろりと縦長い男が姿を見せた。陰気な顔を、面倒そうにゆがめたガーツ先生だ。

「すみません、先生。わざわざもう一度……来てもらって」

窓辺に設置された飾り棚にもたれていたミシエルは背を浮かせ、そのまま両手の指を胸の前で組んだ。

「お願いがあるんです」

「嫌です」

「まだ何も言っていないんですけど」組んだコブシに力が入る。

「だいたい分かります」

両者とも、しばらくにらみ合いが続いた。

「それでは勤務時間が過ぎたので、ぼくはもう帰ります。マイヤーさんも気をつけて帰ってください。さようなら」

「待って、待って、待ってよ！」すがりつくように、ミシエルはガーツ先生の腕を引く。

「……あたし、知ってるんだけど？」

ぴくり、とガーツ先生の片まゆがつり上がった。

「何を、ですか」

ゆったりと唇の端をなめる。そちらは極力見ないようにして、ミシエルは片手を上げた。

「まずはあたしの話を聞いて」

観念した先生は大仰なため息をつきながら、生徒用のイスに腰を

下ろす。

そこは、先程までマーカーの座っていた席だ。散らかり放題の参考書が、そのまま残っている。中のひとつをつかみ上げ、面倒そうにページをめくっている先生の姿を見下ろして、ミシエルはゆっくりと声を張った。

「あたし落第したの、中間試験で。魔法学科には秘密の試験があるって、知らなかったのよ。まあ、一年生はみんな同じだろうけど。でもね、あたしとマーカーだけ、バカで無神経でちゃらちゃらした変態が試験官でね、それって不公平だと思うわけ」

へえ、とつぶやいたきりうつむいたままのガーツ先生を見やり、ミシエルははき捨てる。

「本当はあたし、ハラワタ煮えくり返ってるのよね」

あまりの勢いに、ガーツ先生は顔を上げた。

「……試験に落ちたのは自分のせいだとは、思わないのですか」

「それが正当な試験なら、思うかも知れないわね」

視線がかち合う。分厚い前髪のカートンの奥で、ガーツ先生の細い目が光った。

「不当な試験だと思ってる……のですか」

「もちろん」

どこがですか、とざらりとした響きを含んだ声が尋ねる。ミシエルはすばやく、廊下にくっ引き戸を後ろ手に押さえ、ひとつきりの出口をふさいだ。

そのまま教卓の上に飛び乗って仁王立ちになり、腰に手を当てる。

「あんた、特務の劇に出なさいよ」

ミシエルの高圧的な物言いに、ガーツ先生の口元が奇妙につり上がる。どうして、とかうじてその唇が反論した。

「あんたのせいだから。あたし知ってるもの。先生の……ううん、あんたのヒミツ？」

ミシエルは、ひとつだけまたきをした。

ガーツ先生は「ぼくの」と、抑揚のない声音で何度も繰り返し、

そのうち口元を大きく横にゆがめた。どこからだ、と次につぶやいたとき、その口調はまったく別人のように変わってしまった。

「どこから気づいてた？」

気おされないよう気をつけながら、ミシェルも負けじと胸を張る。「杖よ、あんたの杖。その赤いピ阿斯！ 忘れようたって、無理だわ。悪夢だもの。カツラなんてかぶって変装したって、ムダなのよ。ねえ？」

「へえーえ。何にも考えてなさそうな顔で、ちゃんと観察してましたってか。そうか、ふうん、ほうほう」

ガーツ先生……もとい、ピンクの変態フラミンゴ男は、ふん、と最後に鼻を鳴らした。

「俺様が君たちを完膚なきまでにたたきのめした最強魔法使いのフラミンゴスパイ団だとしてそれが特務の劇に出ることと何の因果関係があるっているのか教えて欲しいものだねそれとも何かい君は……痛っ」

「バカね。顔真っ赤よ、ピンクの変態さん。そんなに一気にしゃべったら、舌をかむに決まってるでしょ。まずは、息継ぎでもしなさいよ」

「ピンクピンクって、ピンクのどこが悪いんだよ。世界じゅうのピンク好きの皆さんに謝ってきなヨ！ そもそもフラミンゴって鳥はピンクなんだから、仕方ないじゃないの？」

キレどころが違うだろ。

この場にマーキーがいたら、確実に突っ込んでいるところだ。

「まあ、百歩譲って俺様が劇に出たいと思ったでしょう」

偉そうに後ろ手に組んだ腕をぴろぴろ動かしながら、フラミンゴ男は歩き始めた。

「……いいわ。百歩でも千歩でも譲りなさいよ」

腰をかめたフラミンゴ男は、声をひそめてミシェルに顔を寄せ

る。
「特務の劇には、特務の人間しか出ることを許されない。OK？」

俺様はもう教師だし？ 子供じゃないし？ そもそもそんな義務な
いしい？ よって、この話は終わり。残念だ」

うかがうように、ちろり、と視線を投げてきたフラミンゴ男は、
ミシエルがなんの反応も見せないことに首をかしげた。

「あれれ？ 何、この放置っぷり。ちよつと、なんとか言ったら
どう？」

？秘密の駆け引き×2

「……ふうん、怖いんだ」

精いっぱいの侮蔑を込めた声音を作り、ミシエルが口を開いた。

「は？」

フラミンゴ男の眉間に、深いシワが刻まれる。

「劇に出て、杖も持たない十六歳に負けちゃったら……教師としての将来が真っ暗だもんね。てか、終了？」

瞬間、フラミンゴ男の耳に収まるピアスが不穏な光を見せた。彼に教師としての自覚が残っていることを期待して、ミシエルはもう一歩だけ踏み込んでみる。

「脚本、もう考えてあるの。魔法学科だったら、リアルおとぎ話を再現できるでしょ。魔法を使ってみせるっていう、条件もクリアしてるしね。それであんたには、意地悪で凶暴で粗野な悪い魔法使いを演じてもらいたいの」

「……意地悪で？」

「そう」

「凶暴で？」

「ええ」

「粗野な？」

「ぴったりでしょ」

ふふん、と鼻を鳴らすミシエルを見やり、フラミンゴ男は大仰なため息を吐き出した。

「ミシエル・マイヤー。気づいてるかい？ それって、君自身のことじゃないのヨ」

「あら、ひどい言われようね」

他人事のように、ミシエルは髪をかき上げた。

「だって、そうじゃないのサ。俺様、君のおじいさんに雇われている身の上なんだよ？ その孫である君のわがままを、はねのけられ

るはずがないじゃないか」

「そうなの？」

満面の笑み。

「だったら決まりね？　ちゃんとやってよね、マーキーの復活がかかってるんだから」

「マーキー？」フラミンゴ男は首をかしげた。

「そうよ、マーキー！　あんたのせいで落第して、最悪な状況なんだから」

「ふうん」

フラミンゴスパイ団、本名マイケル・ガーツ先生は口元にわずかな笑みをたたえてミシエルを見やった。

「いいヨ。ただし条件がある。俺様がフラミンゴ……」

「もちろん！」

最後まで言い切らないうちに、ミシエルは口を挟む。

「だれにも言う訳ないじゃないの。信用して。あたしはただ劇を成功させて、マーキーに復活して欲しいの」

——そして、あんたに一矢報いたいだけ。

「了解した」

ミシエルの企みなど露知らず、フラミンゴ男は首を縦に振った。

秘密の取引の十分後には、迷惑にも再び召集された特務のメンバーが集まっていた。

「んー、わがまま姫たつての希望で、劇に出るよう頼まれちゃってね♪」

皆を前にして、黒いカツラを外したフラミンゴ男が演説を始めた。とがったサングラスでメンバーを見下ろす。その中に、ぼんやりと視線をさまよわせたままのマーキーの姿もあった。何かの本を抱えていて、無意識なのか指先で表紙をなぞっている。

「何それ」目ざとく見つけたミシエルが、手を伸ばした。

「いや、これは……」

ミシエルから遠ざけるように、マーキーはすばやく机の中に本を押し込んでしまう。

「なんで隠すの？」

ミシエルは食い下がった。そっけない表紙だけでは何の本なのか、分からない。

「いや、あれは……その……あとで話すよ」

ぶつぶつ言い訳しながら、マーキーは目をそらした。

――怪しい。

ミシエルは、きつくまゆ根を寄せる。マーキーはよほどのことがない限り、ミシエルに隠し事をしない。その「よほどのこと」があったのか、単に気落ちして説明する気力もないだけなのか、ミシエルには判別できない。

「やあ」

ピンクのかっこうをしたフラミンゴ男が、にこりと片手を上げた。マーキーは強張った表情のまま机から離れ、ふらふらと前に進み出る。

「ミシエル」

なおも不満そうに机を見やっていたミシエルを、マーキーの冷淡な声と呼ぶ。

「なぜここにいるのだ、アレは」

アレって、とフラミンゴ男が反論するのを完全に無視したマーキーのひとみに、久々に光が宿る。

「びっくりした？　ねえ、びっくりした？」

うれしそうにはおを紅潮させたミシエルは、そのままマーキーの腕を取った。

「劇に出てもらうの。どう、いいアイディアでしょ？」

「……これまでの中で最高さ」

薄い唇をかみ締めて目を細めるマーキーをうっとり見やり、ミシエルはため息をつく。やはり、マーキーには強気でいてももらわないとつまらない。

「さあ！ フラミンゴスパイ団」声を張り上げ、ミシェルは腰に手を当てる。

「覚悟なさいっ！ あたしたち特務が、あんたなんかコテンパンにやっつけてあげるんだからねっっっ」

？逆襲★フラミンゴの舞★

別にいいわよねえ、とミシエルが笑う。きゃしゃな手には、大量生産型の朱色の万年筆が握られている。

「この杖、教室から持ち出さなきゃ別に使っても構わないわよね？ね？」

翌日から、劇の練習が始まった。放課後、校内見回り隊をのぞくすべてのメンバーがミシエルの指導の元を集っている。

「それに……学園祭当日も、教室で練習したあとうっかりポケットに入れたまま体育館に向かっても、そんなにたいした問題じゃないわよね？」

「構わないさ」

答えたのは、しっかりと万年筆を握り締めたマーキー・デイリーだった。口元にはうっすらと笑みを浮かべている。中間試験を最悪な形で落第したふたりには連日の補習と、特権である特務仕様の杖の返上が課せられていたのだ。

展望教室には特務のメンバーのほかに二年生がまだ何人か居残っていて、授業の後片付けをしている。その中にいたクロエが天敵の足音を聞きつけたうさぎみたいに、ぴくっと顔を上げた。

機嫌よく万年筆を弄んでいるマーキーは気づいていなかったが、クロエは教室を出るまでずっとマーキーの顔をじろじろ眺めていた。マーキーが軽く万年筆を振ると、居並ぶ机が列を成して廊下へと行進し、椅子がそのあとを追った。余計なもののない展望教室はがらりと広く、そのもっとも奥まった先にはぶ厚い前髪を垂らしたガーツ先生の姿がある。

「先生！」

まさかその正体が嫌悪するフラミンゴ男だとは露知らず、マーキーがほほ笑みかける。ガーツ先生が学園の卒業生であり、かつ特務のメンバーでもあったという話を聞いてから、マーキーはがぜん、

先生を憧れの対象に祭り上げていた。

「事実」を知っているミシエルとしては、早く敵役のフラミンゴ男の姿で登場して欲しいところだが、マーキーが絶えず話しかけて引き止めている状況では追い出しようもない。

「マーキーい、そろそろ練習始めよう？」

ミシエルが声をかける。

「ああ、分かってる。……先生？　ぼく、まだ呪文の発動時間がうまく調整できないのですが、どうやったらうまくいくのでしょうか？」

ミシエルの呼びかけに答えながらも、マーキーはさらにガーツ先生に質問を投げる。

「そうだね」

ガーツ先生は時計に目をやりながら、思案に暮れた顔を作った。
「今度、いい参考書を持ってくるよ」

ぽあああつと子供みたいに大仰に飛び上がってほおを紅潮させるマーキーから、ミシエルは目をそらす。いいのだろうか、と後ろめたい気持ちたちがミシエルの心を支配する。あの冷酷で人を見下す態度が標準装備されているマーキーが、まさかあんなにも冴えないナリをしたガーツ先生を尊敬しだすなんて。

「それじゃあ、練習がんばって」

生真面目な皮をかぶったマイケル・ガーツ先生は、似合わない笑みを口元に張り付かせたまま、逃げるように展望教室を退散した。

「マーキー？」

先生の姿が螺旋階段の下に見えなくなるまで、マーキーは手すりから離れなかった。

「マーキーったら！」

「なんだい？」

急に夢から醒めたみたいな目で、マーキーは振り返る。

「……練習！　先に始めてようよ」

思わず、怒ったような口調になった。

「そうだな、あの変態が時間どおりにくるわけがないからな」

さっきまで目の前にいましたよー、とは言えないミシエルはあいまいに相づちを打つ。

「うん。まあ、そうね……」

「脚本は出来上がっているのかい、ミシエル」

もちろん、とミシエルはコブシを握る。

「題名は、逆襲★フラミンゴの舞★」

「は？」

すうっと目を細めたマーキーの横顔は、空気が凍りつくほどの迫力がある。

「あたしだって嫌よう。でもあの変態がこの題名じゃないと劇に出ない、なんて言い出すもんだから、変えられなかったの！」

ミシエルは、最後まで抵抗したのだと言い張った。

「おかしいのは題名だけよ？ 内容はちゃんとマーキーが主役なんだから」

原案を考えたのはミシエルで、脚本の形に整えたのは演劇部の顧問を務めるマーヴェラス先生だった。

「マーヴェラス先生ってすごい！ あたしがこうしたいっていうのを、どんどん脚本に取り入れてくれて……」

「へえ？」 マーキーは、くすりと口元をほころばせた。あまりにも無防備なその笑い方に、思わずミシエルはほおを赤らめてしまう。

「……ああ、うん。そのお、マーキー王子がね？ 森に住む極悪魔法使いを倒して、さらわれた姫を救い出すの……。それで、それで……」

「姫はだれがやるんだい？」

「……あたし……で、いいかなあ」
思わずうつむいてしまう。

「ほかにだれがいるんだい？」

マーキー・デイリーが、この世でミシエルにだけ見せる優しげな笑み。このところずっと落ち込んでいたマーキーの、その顔が見られただけでミシエルは満足だった。

？復讐は忘れたところにやってくる！？

「それで、その脚本はどこに？」

マーキーは白いブレザーを脱ぎ、窓辺に備え付けられた棚に放った。

「ううん」

言いよどみながらうつむいて、ミシエルはもじもじと上履きをくねらせる。

「レオンにね？ 運ぶのを頼んだの」

「なに」

——やっぱり！

溢れる怒りを隠そうともせず、マーキーは真っ正面からミシエルを見返した。白い陶器のような肌に浮かんだ青筋が、古典的ながらも恐ろしい。

「怒ってる？ ……よね。でもでもでも、脚本ぜんつつぶ持つとすごく重かったの。そこにちょうどレオンが通りかかってね？」

それで……」

「まさか全部？」

「……そのとおり」

レオンとマーキーは正真正銘、血を分けた兄弟だ。両親の離婚で離れ離れになろうとも、サイズの違う入れ子のようによく似たふたりは、ミシエルでも見まがうほどだ。遺伝子とは恐ろしい。

「あんないい加減なやつに頼んだのかい、ミシエル」

「ごめんってば！ でもマーキーがいつしよに来てくれば、なんの問題もなかったのよ？ マーキーったら落ち込むのに一生懸命で、死んだ魚の目ではーっとしてたし」

さり気なく問題をすり替えてみるも、マーキーの般若のような形相から察するに、うまくはいかなかったものらしい。

「レオンって、そんなに悪い子ってワケじゃないじゃない？」

正確に言えば、傲慢なマーキーよりもよほど先生受けのいい、優等生だ。

「それは、ミシェルがアイツの本性を知らないからで……」
さも大問題を抱え込んだといわんばかりに、マーキーは頭を抱えた。

先日の態度から察するに、マーキーは両親の離婚をいまだ許すことができないでいるのだろう。母と弟レオンはもちろん、その再婚先の娘クロエに対しても複雑な思いを抱いているのは明白だ。

「そうだ！」

学園祭には、多くの保護者がやってくる。ラジスター氏はもちろん、マーキーの実母も顔を見せるだろう。

「マーキーとふたりきりで会わせられないかな……」

それには、レオンやクロエの協力が必要だ。ブツブツと物思いに暮れるミシェルをよそに、マーキーは何人かのメンバーに脚本を探してくるよう命じていた。

「ミシェル、とりあえず配役を発表してくれるかい」

残りのメンバーたちが、嬉々としてミシェルを見つめてくる。

「あっ、そうね。分かった」

ところがミシェルが立ち上がるのと同時に、室内にピンクの物体が滑り込んできた。

「怖気づいて逃げたのかと思った」

「小僧相手に、この俺様が？」

瞬く間に、のどかな放課後の空気に亀裂が走る。

首に巻きつけた蛍光ピンクの羽飾りが、ゆらゆら不必要に揺れた。威嚇のように突き出した指先は、しっかりとマーキーの目元に向けられ挑発している。

唇の一端を奇妙につり上げたマーキーは、フラミンゴ男から目をそらさずにきつくにらみ返した。

「天と精霊の名において、マーキーが唱える！」

「地と精霊の名において？ 俺様マイケルが唱えるぜい」

問答無用に呪文を唱え出すふたりは、実は似たもの同士なのかも知れない。

「雷の竜騎士……」

「愛しいハニー……」

ミシエルは唇をかんだ。

「風と精霊の名において、私ミシエルが唱えよう。いたずらゴブリン兄弟、乱暴な大ばか者どもをさっさと捕縛なさい！」

目に見えない何かが、マーキーとフラミンゴ男の足元で渦巻いた。怒りにまかせていつもの数倍の効力で発揮されたミシエルの呪文は、成績優秀な相棒のことも、教師の皮をかぶった奇才のことも飲み込んで、あっというまに場を収束させてしまった。

「……ミシエル？」

完全に度肝を抜かれたふうのマーキーは、そろそろと視線を上げる。それを涙目で迎え撃ち、さらに震える声音で「ばかぁ」と追撃したミシエルの前に、幼なじみは完全に毒気を抜かれた。

「ミシエル？」

小さくつぶやいて頭に手を置くのを、首を振って払いのける。

「ああ、その……ごめんって」

「や」

フラミンゴ男、本名マイケル・ガーツ先生は頭をぽりぽりかきながら窓辺に行き、所在なさげに中庭を見やっている。登場するなり大暴れしたのをさすがに反省しているのか、単に暇をつぶしているのか。

「遅くなりました！」

そこに、引き戸をガラリと開け放ち、レオンが姿を見せた。マーキーをわずかに幼くした感のある少年は、中等部の制服をひるがえして展望教室に入り込み、中央に仁王立ちになって満面の笑みを浮かべた。

「証人を探すのに苦労したんですよ」

その端正な顔立ちの中にある強烈な邪気に、ミシエルは思わず身

を引いた。

？あいるびーばっく(改)

「いったい、なんの証人だ」

マーキーの片まゆが、ぴくりとつり上がる。わずらわしそうにまゆ根を寄せて、きつく弟をにらみ据える。

「ねえレオン、なんの話なの？」

ミシエルもまた、もどかしく問いただした。嫌な予感が頭の片隅をよぎったが、まさかそんなことがあるはずないと、首を振る。

暇そうにうろうろしていた者たちはもちろん、巡回に出ていたメンバーも戻り始め、展望教室は特務の白ブレザーで満たされ始めた。「魔法学科の杖を、外に持ち出そうとしている者たちがいるんですよ」レオンは、ゆったりとコトバを吐き出す。「驚きですよね？」

そのゆるやかな笑い方は、傲慢と打算渦巻く兄の悪魔的なほほ笑みと同じ。

「本当なら、自分たちが取り締まらないといけないのに。さあ、特務のお兄さんたち、違反を犯そうとしている人たちが目の前にいますよ？ 未然に防がなきゃ」

授業中、教科書を朗読するときのようなわずかな恥じらいをにじませて、レオンは声を張った。

「もう逃げられない。観念してもらおう。どうあがいても……キミの負けだ」

どこかで聞いたコトバだと記憶を探り、杖を持ち出そうとしたクロエを捕らえたときのマーキーの姿を思い返した。

「ちょっと待ってよ、レオン。あれは結局、試験のための演技だったんでしょ？ だまされたのはあたしたちのほうなのよ？ それなのに……」

「そんなこと、ボクは関係ありません」

きっぱりと言い放ったレオンは目を細め、ミシエルを真正面から見据えた。

「今ここで問題なのは、皆を取り締まる立場の人間が……自らの違反には甘いつてことなのでは？ 杖を取り上げられたのは、落第して補習を受けているからなんでしょう。だったら、甘んじてそれを受けなきゃ」

後ずさる勢いで、ミシエルは鼻じろんだ。

「何を言ってるのよ、どうしたの？ あたしたち何も違反なんて犯してないわよ」

「授業で使う大量生産型の万年筆、これを持ち出すのはもっとも卑劣な行為だって、言っていましたたよね？」

——確かに。マーキーが。言ってた。

ミシエルの心の内を嗅ぎ取ったかのように、レオンはくつくつ笑った。

ふたりから不自然に目をそらし、メンバーたちは床に目を落としてもじもじしている。理事長の孫娘と、その相棒かつ特務の暴君を捕縛するなど、彼らには荷が重過ぎる。

「証人がだれなのか、知りたいですか？」

動くことのできないメンバーから視線を外し、レオンが次の手を打った。

微動だにせず立ち尽くしていたマーキーが、ようやく身じろぎをする。

「……まさか」

機械的に、小さくつぶやくのが聞こえた。

きつい目元をさらにつり上げて、マーキーは弟を見やる。そ知らぬ顔で小首をかしげたレオンは、満面の笑みを浮かべて引き戸を振り仰いだ。しゃらりと流れるような金の髪を払い、まるで人形のように整った顔立ちの少女が姿を現す。

先ほど持っていた教科書の束は、今はもうその手にない。変わって、きゃしゃな指先で抱えているのは、セント・マイヤー・ハイスクルの法律とも言うべき生徒手帳だった。

「クロエ」

ミシエルが呼ぶと、驚いたようにピン、と長いまつ毛を跳ね上げたクロエは震える声で「すみません」とつぶやいた。

「兄さん。今度の勝者はだれ？」

誇らしげに中等部の制服の胸を張るレオンは、兄の手の中にある大量生産型の万年筆に視線を向けた。

「ごめん、マーキー……あたし……」

タラレバでしかないのは分かっているが、ミシエルは自分の浅はかさを呪った。

「それじゃあ、行ってもらうことになるよね？ 反省室に」

嬉々としてターンを決めたレオンを忌々しげに見やり、ミシエルは磨き上げられた床に膝を付いた。

「最っつっ悪」

固く閉ざされた扉に、ミシエルはコブシを当てる。

「あっ、痛いっ！ ちょ、なんでこんなときに！ ああん、もう！」

八つ当たりを静電気ではね返されたミシエルは、痛む指先をひっそりとさすった。

「ねえ、マーキーい」

再びこの反省室に舞い戻ることになるうとは、思いもよらぬことだった。そう白な顔で床に視線を落としているマーキーになんと声をかけていいものか、ミシエルは惑った。

「……いいことも、あるよ？」

返事はせず、目だけを上げてミシエルを見返したマーキーは、ふふ、と小さく自嘲した。

「ええっと、ほら、今回はおじいさまも学園にいるし」

「だから？」

またたきもせずにかつつりミシエルを凝視したマーキーは、矢継ぎ早にコトバを紡ぐ。

「理事長がいるってことは今回、ぼくたちは代理ではないってことだよ。ここを出るには理事長の許可が要る。杖の返上とあれだけの補習を容赦なく孫娘に課した理事長がどうしてもすぐにハンコを押すと思うんだい」

「ぐうふん」

21 敵か味方か？ もう知らねえ！！！！！！

散々うめいてから、ようやく自分たちの状況を理解したミシエルは、惑うひとみを幼なじみに向ける。

「どうしようか、マーキー」

「そうだな、どうするか……」

「ドウシヨウねえ？」

がばりと身を起こす。

「ちよ、なんであんたまで反省室にいるのよっ！」

ピンクの変態が、ただっ広い無機質な床に正座してふたりを見上げている。

「……ねえ？」

——聞いている本人に同意を求められても。

がつくりと肩を落としていいるマーキーの隣にいそいそと移動したフラミンゴ男の胸倉を、ミシエルはがっちり引っつかんだ。

「あんた中身は教師でしようがっ！」

「ねえ？」

「だから、あんたが聞くな！」

ぼそぼそと小さくののしり合うふたりを、マーキーが一瞥した。

「元はといえば、おまえがすべての元凶だ」

どくり、と心臓が高鳴る。

「おまえみたいな変態が大事な試験にかかわるから、こんなことになる。あれからすべてが狂った。責任取れ」

——びっくりした。

ミシエルは白ブレザーの胸を、ぎゅううう、ときつく押さえた。

（あたしのせいって、言われたのかと思った）

杖を持ち出そうとそそのかした記憶の新しいミシエルは、後ろめたい気持ちを抑えられない。

「ここから出せ。今すぐに」

マーキーの額に、青筋が浮かぶ。

「えっ？ 待ってヨ、ちょっと。今はサ、どうしておまえがここに
いるんだあーとかナントカ聞いてくるターンじゃないの？」

「五月蠅い」

「えっ、今ウルサイとか言った？ 漢字の難しいほうで、わざわざ
言った？」

凍りつきそうなほどの冷たい一瞥をフラミンゴ男にくれてやり、
黙らせる。

「……すごく気になる」

ミシエルがつぶやくと、うれしそうに振り向くフラミンゴ男。

「やめろ。こんな変態にエサをまくな」

みるみる顔が曇る。

「ちよつとお、ボクこれでもこの学園の卒業生なんだよう？ 反省
室なんて何回放り込まれたか♪ 抜け穴を通ればどこに出れるのか、
ちゃくくくんと覚えてるもんね？」

はたと顔を上げたマーキーは、このとき初めてフラミンゴ男の顔
を真正面から見つめた。

「あれ、おまえ……」ぎしぎしと音が出そうなほど、ゆっくりと小
首をかしげる。

（まずい、感づいた？）

ミシエルは、フラミンゴ男の痩せた顔を目かけ、思い切りよくコ
ブシを突き上げる。

「おわあちゃっちゃちゃ、何すんだヨ」

ほおを押さえ、涙目で抗議するフラミンゴ男のことは完全スルー
し、ミシエルはもう一方の腕を腰に当ててノリノリでポージングし
た。

「それじゃあ脱出作戦、イキますか！」

おーっ、と無理矢理コブシを突き上げるポーズを決めさせられて、
マーキーがふてくされる。ミシエルは、マーキーのわき腹を小突い
た。

「出られるんだから、いいじゃない」

顔をぐーで殴られ、ほおを腫らしたフラミンゴ男は、「いててて」と大げさにうめいている。

「ねえ？」

反応はない。

「ねえってば！」

つーんと、イマドキ小学生でもやらないベタベタなしぐさで返し、フラミンゴ男はゆらゆら揺れている。

「あんた歳いくつよ？」

マーキーがちろり、と目線を上げる。

「俺様？ ソウネ。十八年と六ヶ月、二十八日目だけど？」

はあああああ、と深いため息をついたのは、ミシエルだ。

「そんなワケないじゃないの。十八歳になんて、見えないわよ。ばつかみたい」

それじゃあ、とフラミンゴ男は口をとがらせる。

「そっちの目が節穴なんだヨ。俺様ががん飛び級してずうつつと前に卒業しちゃったんだよねえ、ふふふ」

「本当に？ じゃあ、大学は？」

満足そうに口元をゆるませたフラミンゴ男は、ふひゅう、とかすれた口笛を鳴らした。

「モチモチ」

「だったらそのまま人生も卒業してしまえ」

マーキーの冷静な突っ込みも聞こえないのか、フラミンゴ男は笑っている。

「なんていうの、超天才？ こんな素晴らしい才能を持った魔術師は今まで見たことがありませんって、言われ続けてきたんだよねえ？」

「ああ、紙一重ってやつね」

失礼極まりない感想をこぼしたミシエルに、マーキーも激しく同意した。

22 特務の脱出紀行☆

ココダヨ、とフラミンゴ男が言うのを聞いたのは何度目か。

「あれれ、おつかしいなあ？ 窓の下に秘密の通路があったんだけどなー」

「まちがえてるってことはないの？ 場所」

フラミンゴ男と並んで、ミシェルは窓辺の床を探っていた。

「いやいや、まちがえるはずがないヨ。だって俺様、自分で通路を掘ったんだよねえ。じゃあ、あっちの窓の下も探ってみようか」

言われるがまま、ミシェルは窓の下を這いずり回った。マーキーは根が生えたように微動だにせず、腕組みをしている。唇を真一文字に引き結び、またたきひとつしない。

「ほらほらあ、急いで急いで♪」

「ん？ ちょっと待って。なんでアンタが命令するのよ」

「いいからいいから」

フラミンゴ男は上機嫌で、部屋の中央に立った。

「思い出したんだよう♪ 俺様、封印の呪を施しておいたんだヨネ」
うきうきと髪をかき上げ、ピアスに手を添えて今にも呪文を発動させようとしているのを、マーキーの鋭い声音が阻んだ。

「おい」

待ちわびていたかのようにぴたりと動きを止め、フラミンゴ男はゆったりと口角をつり上げる。

「杖を持っているのなら、魔法で扉を破ればいいだけの話だろう」
分かってないねえ、と大げさにまゆをひそめ、フラミンゴ男はくつくつ肩を震わせる。

「正攻法しか思いつかない大ばか者は、底の浅い人間なのさ」

「いや、まったく意味が分からない」

冷静なマーキーは、ふい、と顔をそらした。

「あらら、いいの？ 目を離しちゃったら俺様、思わず魔法とかを

発動させちゃうかも知れないよ？ それでもって、あまりの大爆発に警報装置が作動して学園じゅうが大騒ぎになっちゃったりするかも知れないよ？」

「マーキー！」

ミシエルは幼なじみを振り仰ぐ。

「任せろ」

短く言い添えたマーキーはフラミングゴ男の背後に回り、後ろ手に腕をひねり上げた。

「いたたたたたあああい……んですけど！」

涙目で抗議するフラミングゴ男は、降参とばかりに残った腕を高く掲げている。前回の対決で懲りたマーキーは、すばやく彼を床に組伏し動きを封じた。

「はあああ、もう降参、降参。ちゃんと通路の封印を解くからさあ……離して？」

「はあ？」

引きつったほおをわななかせ、マーキーは目を細めた。

「ごめんなさいって♪ 通路はここだよ。扉の封印さえ解けば、あとはトンネルを抜けて外に出るだけだってば。そうしたら、ミシエルちゃんは理事長に反省室入りを撤回させられるでしょ？ もう学園祭まで時間がないんだから、早くこんな所出なきゃ」

「……そうね」

「ミシエル、こんな変態の口車に乗るな」

「でも……あたし、本当に……」

マーキーを反省室に入れてしまったのは、自分のせい。涙目になって唇を引き結んでいると、ふたりからずいぶん離れた場所からフラミングゴ男の声が響いた。

「大丈夫？ 俺様が助けてあげるよ。脱出できる反省室なんて、作るほうが悪いのサ」

いつのまにかマーキーの腕を逃れたフラミングゴ男は、格子の付いた窓辺にほおづえを付いて白い歯を見せている。

「地と精霊の名において？ 俺様マイケルが唱えよう。愛しのハニ
ー、おまえの本当の姿はどこだ？」

淡い光が反省室を覆った。あまりのまばゆさに、思わず目を伏せる。またたきを繰り返したミシエルが次に顔を上げたとき、目の前には頑丈な持ち手の付いた扉が現れていた。

「行って」フラミンゴ男が薄く笑う。

「この扉は、だれかがここに残って操作しなきゃ開かない仕組みなのサ。さあ、行きな」

「おかしいよな」

並んでトンネルを進みながら、マーキーは真剣な目でミシエルを見返した。

「あの変態。ここに入れられた理由、結局……言わなかった」

やけに疑り深くなったものね、とミシエルは笑う。

「面倒くさかったんじゃないの？ 説明するの」

「そうか、な」

短いスパンでだまされ続けたマーキーは、完全に人を信じる事ができなくなっている。

「……そんなに心配することないわよ」

分かった、と目を伏せるしぐさで返す幼なじみを先頭に、ふたりはひたひたとトンネルを進んだ。

暗闇は続く。

時おり、遠くで金属をこすり合わせるような音が響いた。不安になり小さくしゃくり上げると、マーキーは何も言わずにミシエルの手を取って握る。膝を付いてようやく通り抜けることができる細い坂を下っていくと、わずかな明かりが目飛び込んできた。

ぎゅうう、と握った手に力が込められる。手をつないだまま、ふたりは駆け出した。

「出られる？ 出られるよ、マーキーい！」

「もちろんだ、ミシエル」
そのあまりのまばゆさに、ミシエルは目をしばたたせた。

23「抵抗してみる？ ムダだけど」

とりあえず、笑ってみよう。ミシエルは顔を引きつらせて、口元をわななかせた。

「おい、どうなっているんだ？」

マーキーが面食らった表情を隠さずに、ミシエルの肩をつかむ。その指先はわずかに震えていて、動揺のさまは明らかだ。

「おや……孫娘がメインディッシュに出てきたわい」

ミシエルの祖父でもある学園の理事長が、ぽつりとつぶやいた。そこ、は豪華な装飾の施されたレストラン。しかも、その中央に設置された巨大な円卓の上だ。ミシエルとマーキーは、卓上に飾られた大振りの花器の合間から顔を出してうろたえているのだった。

「お客様？ そのような場所に登られては……」

あとからやってきたウェイターに注意され、火が噴き出そうなほど赤面したミシエルは、やはり青ざめた面持ちのマーキーと共に慌てふためいた。

「すすすすみません！　すぐに降りま……す……あれ、どこから降りたらいいのか……」

四方を湯気の立ち上る料理に囲まれたふたりは、あたふたと立ち往生した。

「ミシエルや、そうばたばた動き回られてはせつかくの料理が台無しになってしまう」

ナイフとフォークから手を離さない祖父は、のんびりと口をもごもごさせている。

「しばらくそこで座っておれ」

理事長のコトバのあと、まるで置物のように動かなくなったマーキーを尻目に、ミシエルはなおも祖父に食い下がる。

「ええっ？　ヒドいわ、おじいさま！　あたしだってエビのソテーとか食べたいのにい」

「いや、今夜はだめじゃ」

「どうして」

ほおを膨らませたミシエルは、そこで初めて祖父には食事の連れがいることに気づいた。

「あっ、失礼しました。あたし……私、孫のミシエル・マイヤーです。今夜はお会いできて光栄ですわ」

食事中の円卓の上に突然現れておいて、今さら丁寧にあいさつしても後の祭りだ。それでも祖父の客人はミシエルのコトバにうなずくと、満面の笑みを浮かべた。

「理事長は孫の自慢を欠かさないお人ですからね、あなたのことはいつも聞いています」

ヒゲを蓄えた客人は「特務での活躍もね」と、ふふ、と口元をほころばせる。

「ありがとうございます。でも、あの、その……私たちまだまだ未熟者で……」

いたたまれない気持ちに包まれる。

レストランは、正装した客で満員だ。皆、不思議なものを見る目で円卓の上で正座するふたりを見つめている。

「いつも何かと失敗ばかりで……ね、マーキー？」

「ぶっ潰す」

「はい？」

ミシエルは円卓の上にいることも忘れて、のけぞらんばかりに驚いた。

「何を唐突にコワイこと口走ってるのよっ、マーキー！」

小声で振り仰ぐと、マーキーの鬼のような形相とかち合った。そのすぐそばを、若いウェ이터が湯氣を立てる大皿を運んでいく。

「なんだって、マーキー君」

祖父が小首をかしげた。

「ううん、なんでもないわ、おじいさま。……ちよっと、マーキーってば！」

ミシエルは、眉間に深いシワを刻んでいるマーキーの視線を目で追った。

「ああ」

電飾で飾られた街並みを背景に、窓のすぐ外でフラミンゴ男がくによりくによりと踊っているのが見える。何か口を動かして挑発しているようだが、何を言ってるのかまでは分からない。

——うん。ぶっ潰して構わない！

ミシエルは、涙の溢れ出る目をしっかと閉じた。

「さて」

食後の熱い紅茶をすすりながら、祖父が理事長の顔を作った。

「ミシエルや。そろそろそんな愉快な場所から降りて、わしらの食事のじゃまをした理由でも説明してみるかね？」

まあまあ、と取り成すように声を上げた客人は満足そうに笑った。
「わたしは十分に楽しめましたよ、理事長。いいではないですか、若いうちには失敗もよい経験になるでしょう」

「しかしね、ラジスター君。わしは……」

「ちよっと待って！」祖父のコトバを遮って、ミシエルは客人の顔を凝視した。

——それならば、つまり。

いまだ固まるように窓の外をにらみ据えているマーキーを引っ張って、ミシエルはようやく円卓の上から降り立った。

「……クロエのお父さん！」

だからこそ、マーキーは先ほどから恐ろしいほどの沈黙で抗議しているのだ。自分を置いて出て行った母と、再婚した男。その前でこの失態。マーキーには屈辱的すぎる。

「あの、こんなところから出てきたのにはちゃんと理由があるんです！」

どうかしてこの状況を説明しようと、ミシエルは語気を荒げた。
「あたしたち、だまされたんです！ 脱出しようとして……反省室
から？ ……あれ？」

しだいに、自分の話そうとしていることが、正当性のカケラもな
いということに気づいたミシエルは、あはははーと窓辺を見やり
ながら額をかいた。

24 大根食べて？大団円？

ミシエル、とマーキーが口を開く。うながされたほうを見やると、店内に入り込んだピンクの変態が椅子に座って注文しているところだった。

「ああ……エビ……あたしも食べたい」

「違う」

理事長とラジスター氏の視線をかくぐるようにテーブルの下にもぐり込むと、マーキーは顔だけ出してフラミンゴ男をアゴでさす。「妙なんだ。さっきからあいつ、手帳を出したりしまったり、メモを取ったり……」

ミシエルは目を皿のように見開いてフラミンゴ男を観察した。

「日記を付けてる、とか？」

ふん、と鼻先でせせら笑ったマーキーは、目を細めてフラミンゴ男を見やった。

「確かにいちいち書いておかないと、何も残らなそうな脳みそではあるな」

目元の座ったマーキーに対し、はははーとミシエルは乾いた笑いで返す。

「ところでミシエルや」理事長が小花模様のティーカップを置いた。

「何かわりに用でもあったのかな？」

「いいえ、おじいさま。あたしたち……」

「理事長！」マーキーが勢い込んでテーブルの下から躍り上がった。「お話があります！　ぼくたちは特別警戒任務隊として、日々活動せねばならない身です。杖を取り上げられてしまつては、任務に支障が出ることは明白。どうか、今一度処分を考え直していただきたいのです」

ふうむ、と腕を組んでしまった理事長の横で、ラジスター氏がさりと口を開く。

「しかしそれを踏まえた上で杖の返上を課せられたのだとしたら、よほどのことを君たちはしたのだろうね」

なんとかマーキーの援護をせねばとミシエルは、あたふたと地団太を踏んだ。

「……ん？」

窓辺に陣取るフラミンゴ男が、大量の大根サラダを前に舌鼓を打っている。次に、彼はマーキーの言う手帳を取り出した。もう一方の手で万年筆を握り、さらさらと何事か書き始める。

「あの万年筆って、授業用の大量生産型の杖に似てる」

さらに凝視するミシエルの前で、フラミンゴ男は懷からニット帽を取り出して目深にかぶった。不必要に長い手足を伸ばして、お得意のポーズまで決めた。

「ラクダ印の模様替え♪」

「あれって最初に会ったときにかぶってた、変装用の……あっ！」

ミシエルは弾かれたように立ち上がり、反転して祖父とラジスター氏の合間に立つ。首をひねるマーキーのほおを両手で包み込み、「分かった!」と声を張った。

「何が、分かったっていうんだい？」

久しくなかった丁寧な口調で、マーキーが尋ねる。

「分かったの、何もかも。そうよ、まだ続いていたんだわ。でなきゃおかしいもの」

確認するようにミシエルは窓辺を振り仰ぎ、満足そうにうなずいているフラミンゴ男・本名マイケル・ガーツ先生を見やった。慎重そうにまゆをひそめるマーキーには極上のほほ笑みで返し、ミシエルはラジスター氏の前に進み出る。

「そう、やつとお会いできました。私たち、理事長代理をしているときに……あなたに会うように指示されていたんです。ずいぶん遅くなってしまいました」

中世の騎士がやるように、胸に手を当てたラジスター氏は、こくりと小さくうなずいた。

「ええ、これで追試は終了です」

祖父もまた笑っている。

「マーキー！ マーキー！ あたしやったよ！」

飛び上がったミシェルは、幼なじみに飛びつこうとした。ところが。

「ちょっと何やってるの！ もう追試は終わったんだから、変な騒ぎは起こさないで！」

白いブレザージャケットを脱ぎ捨てたマーキーが、フラミンゴ男の胸倉をつかみ上げている。いくら引きはがそうとしても、逆にマーキーはどんどん力を込めていく。

「だめよ、せっかく何もかもうまくいきそうなのに、これじゃまた反省室送りになっちゃう！ ちょっと、あんたも教師なんだからちゃんと教師らしくしなさいよ！」

最悪なタイミングで店内の演奏が途切れ、恐ろしいほどの静寂が訪れた。

「……教師？」 マーキーがつぶやいた。「だが、だ？」

マーキーが、ゆったりと口角をつり上げる。

「ああ、うん、その……そのフラミンゴ男がね、本当はガーツ先生なの。だから……」

ホールドアップしながらに両手を上げたフラミンゴ男は、げぼげぼ苦しげにうめいている。

「知っているよ」 さらりとマーキーの口が動いた。「もちろん、知っているとも」

急激に押さえ込んでいた両手を離し、マーキーはきびすを返す。

「理事長。査定は終わりました」

「は？」 ミシェル以上に目を点にして、フラミンゴ男が口をぽかりと開けた。

「……勤務態度、服装、言動など考慮すべき点は多々あるようです。肝心の魔法の能力に関しましても、一年在籍のボクと同等程度ではタカがしれていますしね。復職は当分延期にすべきというのがボク

の考えです、理事長」

そうか、と答えた理事長は「まだ早かったかの」と首をかしげた。「ちよつと待ってよ、マーキー。えっと？ フラミンゴ男はあたしたちの追試をやっている……そのフラミンゴ男をマーキーが査定してたってワケ？ なにそれ！」

がつくりと膝と両手をついて「はあああああ」と長いため息をもらしているフラミンゴ男を一瞥し、「一部訂正」とマーキーは唇の一端をつり上げて笑う。

「追試を受けていたのはキミだけだよ、ミシエル」

マーキー君の演技力は素晴らしいねえ、と理事長の高笑いが響いた。学園祭をひと月後に控えた、ある夕食時のできごと。

25 ドームでどん♪♪♪

深いため息を繰り返し、ミシエル・マイヤーは中庭の一角を見下ろしていた。深い緑色のブレザーを着込んだ群れの中で、マーキーの特務仕様の白ブレザーがやけに目立って見えている。

「そうですね。学園祭では、特務の勇姿をお見せすることができるでしょう」

広報部の面々に取り囲まれ、嬉々としてインタビューに答える幼なじみの姿を遠目に見やり、ミシエルはまたも深いため息を取り落とした。

「もちろん、わが特務は魔法学科の名に恥じない最大呪文を披露するつもりです」

期待してますわ、と広報部の女子が胸の前で両手を組んだ。マーキーはわずかに口元をほころばせ、完璧なほほ笑みを作る。

そのまま悠々とした足取りで階段を上り、ミシエルのいるカフェテラスまでやってきた。

「ミシエル」片手を上げて目を細めると、そのまま真向かいに腰を下ろす。切れ長の目元には、まだわずかな微笑の名残があった。

「インタビューしてた子、かわいかったねえ。……ふふ」

「そうかい？」

沈黙が落ちる。

「……ふう」またも、ため息。

「ミシエル、そろそろ許してくれても」

そうつぶやいたマーキーは、黒光りする腕時計をはめ直した。

「別に、怒ってなんかないんですけど」

「コトバの端々からトゲが出ているよ」

マーキーは、すらりと長い腕をミシエルの肩に回す。

「さあ。機嫌を直して、行こう。そろそろ彼らも来ているころだろう」

夕べは長い夜だった。幼なじみのミシエルさえだましていたことを、マーキーは何度も「悪かった」と頭を下げた。それでもなお、釈然としない思いがミシエルの腹の中で渦巻いている。なぜ、教えてくれなかったのか。どこからが演技だったのか。

夜色の短髪に風をはらませたマーキーは、颯爽と歩き出す。黒リボンが幾重にも巻きつけられた手首を、するりとミシエルに向けた。「……やだな」

「何がだい？ ミシエル」

「今日のマーキー……やけにかっこいい」

えっ、と首を傾げたその表情から察するに、ミシエルの声は届いていない。

「なんでもない」ぼつてりとした唇をとがらせる。「でも、ズルい」階段を上りつめ、ふたり並んで展望教室に向かった。途中、授業を終えたばかりのマーヴェラス先生とすれ違う。

「先生、今日も紫ですね」

「あらん、ミシエル。あなたは……桃色ね」

ミシエルは首をひねる。

「あたし……ピンクの要素ゼロなんですけど？」

中間試験からずっと、ミシエルはその色を避けている。

「違うわあん、そういう意味じゃないの。……まあ、気づいてないのならいいんだけど」

変なの、とミシエルは笑い上げた。ねえ、と返事をうながすミシエルだったが、マーキーは顔を背けたまま階段を上っていつてしまった。

「あっ、ちょ、待ってよう」

展望教室の引き戸を開けると、二対のひとみがミシエルを見つめた。おまたせ、と片手を上げてあいさつしながら、ミシエルは中央に進み出る。

「わたくしも今、来たばかりですよ」

深い海色のひとみが、ほほ笑みかけてきた。まばゆい日の光を受

けた金の髪が、絹糸のように輝いている。マーキーがね、とミシエルはほおを膨らませた。

「広報部に捕まっちゃったの。それで、インタビューが終わるまでずっと待ってたのよ」

まあ、とクロエはくすくす口元を覆った。

「だったらサ、捨てて来ちゃえばよかったのにねえええ」
妙に節の付いた声音が、ドーム型の展望教室に響く。

「おや、そこにいたのか……出戻りフラミンゴ」

鼻で笑うマーキーに対し、フラミンゴ男はものすごい勢いで立ち上がり、両手を水平に構えた。

「……出戻り言うな……言うなって……」

まあまあ、とおざなりに背中をさするクロエは手馴れたものだ。

「でもあたし、びっくりした。クロエとフラ……、ガーツ先生ってすごく仲良しなのね」

ミシエルは意味深に見つめ合うふたりを、ちろりと目の端で追う。

「ガーツ先生はね……ふふ」

クロエはフラミンゴ男に柔らかな視線を送り、「わたくしたち傲慢の先輩なのですわ」と、はじけるように破顔した。

「わたくしが学園を辞めようとしていたときも、いろいろ考えすぎて眠れなくなったときも、いつもいつも……大丈夫だ、心配することじゃない……と励ましてくれたのです」

フラミンゴ男のことはもちろん、クロエにも屈折した事情を抱えているマーキーは、そう、とだけ軽く返事をした。

「あら、ピンクの変態にしてはいいこと言うじゃない」

ミシエルが代わりに、フラミンゴ男の肩をたたく。

「そうだな」マーキーが続けた。「飛び級の連続で卒業し、学園の教師にまでなったのが傲慢というのに、失格の烙印を押されたばかりか、もう一度『特別生徒』として三年生に出戻りした男の割にはいいことを言うじゃないか」

光の降り注ぐ展望教室。その中央で、無駄に激しい火花が散った。

26 少数精鋭で行こう!?

いい教師になるには生徒の心を理解しないと、とは理事長のコトバだ。猛烈に反発したフラミンゴ男ことマイケル・ガーツ先生は、それでも最後には首を縦に振らざるを得ない状況に追い込まれた。

「退職か、特別生徒か」

二者択一を迫られたときの顔といったら、はたで見えていて気の毒になるほどだった。

「とにかく、学園祭が終わるまでは天才教師の名は返上し、普通の十八歳として人生を楽しみたまえ」

そう命じたあとの理事長は、分厚い何かの冊子にさらさらとペンを走らせた。

懐を探り、判を押すのを見たマーキーは鬼の首を取ったかのように嬉々として喜んだが、あの男がこのまま大人しく引き下がるとも思えない。注意するようにうながすミシエルに、さらにマーキーは続けたのだ。

「あいつを特務に引き入れよう」

それは、憎き敵を配下に収めるためである。そして、その打診のための今日の呼び出しだ。

フラミンゴ男は、まじめな教師仕様の黒スーツを羽飾りで台無しにし、蛍光どピンクの頭の上に、とがったサングラスを乗せている。(バランス悪ううう) ミシエルは目をそらした。

「おい、出戻り。制服は着ないのか?」マーキーが笑いを含んだ声で揶揄する横で、クロエが心配そうにふたりを見やっている。

「腹黒優等生のマーキー君?」

フラミンゴ男が、唇の端をわななかせながら呼びかけた。

「なんででしょう? 出戻りフラミンゴ」目を細めたマーキーが応じる。

「……はあ」深いため息を取り落としたフラミンゴ男は、「まあ、

なんだ。たとえば俺様が出戻りだとしても」とアゴを突き出した。

「たとえずとも、その通りだが」

いちいちダメージを受けている様子のフラミンゴ男は、がっくりと膝を折っている。

「あのっ！ わたくし、菓子を焼いてきたのです」

そこに、ほおを赤らめたクロエが割って入った。桃色の包みをフラミンゴ男に、銀色の包みをマーキーにそれぞれすばやく手渡した。「どうぞ、食べてみてください」

包みから漂うおいしそうな匂いに引かれ、ふたりはノドを鳴らす。窓から入り込んでくる風が、クロエの絹糸の髪を方々になびかせた。それを慌てて押さえ込む細い指先。大きくてうるんだ視線がミシエルの上で止まり、満面の笑みを浮かべる。

思わず目を伏せた。床には、つんつん立たせた短髪影がひとつ。ミシエルの足元からのつぺりと伸びていた。

うまいな、とマーキーがぽつんとつぶやく。そのあとは何も言わずに黙々と口に運んでいった。フラミンゴ男はひと口ごとに暑苦しい感想を述べ、そのたびにクロエは楽しそうな笑い声を上げた。

よかったですわ、と恥らう姿を見やって、ミシエルはなんだか急に落ち着かない気分になられる。そのままバッグの中を探るそぶりで、クロエの視線をさえぎった。

「見たか？」

突然、マーキーがミシエルのほおに顔を寄せてくる。

「え、えええ？ ……何を」

動揺を隠し切れずに、ミシエルは視線を泳がせた。

「やはり、あいつはアレの弱点だ」

そのままアゴの先をクロエに向けて、口角をゆがめていく。確かに、ふたりは仲むつまじい。クロエの視線は熱くてまっすぐに思えたし、フラミンゴ男もやけに気取って見える。最低最悪の間試験のときも、フラミンゴ男が秘密の相棒に指名したのは……クロエだった。

「だから、利用しようと思うんだ」

そっとささやくマーキーの声音は川のせせらぎのように涼しげだが、内容は腹黒い。

「うわぁ、マーキーったら悪役みたいな台詞う」

「利用できるものは、何でも利用する。ぼくの信条だよ」

ふふん、と顔をそらせたマーキーは満足そうだ。

「あいつ……その、クロエ……がいれば、ピンクの変態は油断する」
なぜかその名を呼ぶとき、マーキーのほおに赤みが差した。

「それってつまり、フラミング男だけじゃなく彼女もメンバーに入れるってこと？」

刺々しい言い方になってしまったのが、自分でも分かった。そのまま唇を引き結んでしまったミシエルを、マーキーは不思議そうに見やる。

「いいよ。メンバー入りに反対はしない。でも……」

「でも？」

小首をかしげてさらにのぞき込んでくるマーキーのほおを、軽く押し返した。

「いい、教えない」

花が咲いたように笑うクロエの整った横顔を、ミシエルはそっと盗み見る。だれのどのような目を通して見ても、彼女ほど魅力的に映る者はないだろうと思えた。

「このぼくに隠し事なのかい、ミシエル」

不満げなマーキーから距離を保ち、ミシエルはコブシを突き上げて仁王立ちになった。

「よっし！ 細かいことは考えない！」

驚いたように目を見張るクロエとフラミング男の前で、ミシエルは宣言する。

「いい？ ふたりを特務のメンバーにスカウトします！ 学園祭では、あたしたち特務が一番目立つつもりよ？ 少数精鋭で殴り込みするんだからねっ」

信じられない、といった面持ちでほほ笑む彼女の視線の先を何度も確認して、ミシェルはため息をもらした。

——よかった。マーカーを見ているんじゃないくて。

27りんご食う王子と皿割れた姫。

「それじゃあ、みんなが来るまで脚本でも見てる？」

ミシエルは時計を見やりながら、咳払いをした。

天邪鬼のフラミンゴ男の説得にはもつと時間がかかると目算していたマーキーが、ほかのメンバーの集合を遅めに設定していたのだった。

「ええっと」すったもんだの末に獲得した脚本を、ミシエルはしばらくとめくる。

「あたしがね、だいたいの道筋を考えたのよ」

誇らしげに胸を張り、ミシエルはふんぞり返った。

「それに、マーヴェラス先生が脚色してくれて……うっは！ ナニコレ！？」

ミシエルの手が止まる。驚愕のまま見開かれたひとみが、脚本の上に釘付けになった。

「えええっ、なにになになに！ 違う、これあたしの脚本じゃないっつっ」

フラミンゴ男が額にかけていたサングラスを、するりと目元に引き落とす。

「……あんたでしょ！」

飛びつかんばかりに指さして、ミシエルが怒鳴った。

「何がさ」

含み笑いのまま、フラミンゴ男がくくくとノドを鳴らす。

「あたし、こんなふざけた配役してない！」

にやりと口角をゆがめている元教師を押しやって、マーキーがミシエルの手元をのぞき込んだ。

「配役……隣国の王子、マイケル・ガーツ。さらわれた姫、クロエ・ラジスター？」

涙目のミシエルの指が、さらにその続きを示す。

「りんご食う王子、マーキー・デイリー。皿割れた姫、ミシェル・マイヤー……へえ」

淡々と読み上げたあと、冷静すぎるひとみを向けたマーキーは、だからどうしたと言わんばかりにフラミンゴ男を一瞥した。

「あつれ？」

ファイティングポーズまでして待っていたフラミンゴ男は、期待外れと言わんばかりにばかりと口を開ける。

「ねえねえ？　ここはサ、なんだこれはつつ！　みたいに驚くところですよー」

「ばからしい」

一蹴したマーキーは、ひらひらと片手を振った。

「えええええ」

逆に、仕掛けたフラミンゴ男のほうは歯切れが悪い。

「いいの？　その反応。まちがってない？　まさか、このままの配役で納得しちゃったとか？　意外にそういうタイプなの？」

「ふざけないで！」両手を顔の前で構え、ミシェルが割って入った。「なんで勝手に変えちゃうのよ、ばかあ」

やめろ、とマーキーの腕がミシエルの口元に伸びる。

「わめきたてると、ヤツの思うつぼだ」

「でも！　本当はマーキーのための脚本なのよ？　あたし、マーキーに少しでも元気になってもらいたくて……」

マーキーのひとみが、ふにゆり、と細くなる。

「それならもう、十分だよ」

「……マーキーい」涙目のミシエルは、幼なじみの腕にそっと手を添えた。それを見て、今まで黙り込んでいたクロエがフラミンゴ男の腕を引く。

「だめですよ、先輩。これには、ミシエルちゃんの想いがつまっているんですからね」

でもねえ、とフラミンゴ男はもったいぶってターンを決める。

「俺様、優等生の皮をかぶったダレカさんにだまされて、傷心のど

ん底なんだよねえ。これくらい許してヨ」

「だめです。ねえ？」

わずかにまゆ根を寄せたクロエが、小首をかしげてマーキーを振り仰いだ。

「いや？」マーキーのほうは、余裕の表情で対応する。

「ぼくは一向に構わないよ。りんごだろうが皿だろうが、引き受けよう？」

憎きフラミンゴ男を出し抜いたのがよほどうれしいのか、多少のことでマーキーは動じない。慌てたミシエルが声を上げる。

「えええ、あたし嫌よう。なんで皿を割るのよ姫が、ねえ？」

同意を求めたつもりが、振り向いた先にいたのは喜色満面のフラミンゴ男だった。

「まあ、それはアレだ。その場の勢いだ。せっかくニセモノ優等生君が承知しているんだし？ さっさと脚本の披露といきましょうかー」

「嫌よ、絶対に。どうせ、内容まですり替えているんでしょ」

ふふふ、と節のついた声音でフラミンゴ男は含み笑う。

「ミシエルちゃん？ 彼は俺様と魔法合戦さえできれば、劇の内容なんてなんでも構わないみたいよー。そろそろ観念したら？」

じゃあ、と前置いてからフラミンゴ男はめちゃくちなあらずじを読み上げ始めた。

「りんご好きの元・王子（魔王）にさらわれた姫を救うべく、立ち上がる超絶美形な王子がひとり！ ……それ、俺様ね？ 供をするのは、食えることが何よりも好きな静電気体質の女中！」

大げさな身振りで膝を付き、片手を胸にもう一方を前方に突き出した。

「はい、それがミシエルちゃん？ ……対する魔王にも悩みがあった。美しい姫がいつこうに笑みを見せないのです。なげき悲しんだ姫は次第に弱り、とうとう床に伏せってしまいマス。魔王は決意するのです。姫のために旅に出よう。世界じゅうを回って、助けて

くれる医者を探すのだ！」

深い深いため息をふき付けて、ミシエルは磨き上げられた床に目を落とした。

「なにその支離滅裂……」

28 順調と書いてパニックと読みマス十十十

まあまあ聞いてヨ、とフラミンゴ男は上機嫌だ。

「王子一行は、魔王の住む城に到着する。そこには眠りにつく美しい姫の姿が！ 魔王は医者を探して旅の途中。王子は労せず姫を救い出し、めでたしめでたし……ところが！ 醜悪な魔王が追いかけてくる。魔王と戦う、けなげな王子。激しい戦いの中、女中は高価な皿を割ってしまう……さあ、どうだ？」

「なにそれ」ため息をついたミシエルは、激しくフラミンゴ男をにらみ据えた。

「どうして今メンバー入りしたばかりのクロエが姫で、あたしが……この、あ・た・し、が女中なのよ」

「鏡を見ろヨ、お譲ちゃん？」

ミシエルのコブシに力が入る。

「いいわ、やってやろうじゃないの。皿だってなんだって割ってやるわ！」

やけになって叫ぶミシエルの視界の端で、からからと引き戸が開いた。

「あの……」

顔だけ出して中の様子を探っているのは、マーキーの実弟であり、クロエにとっては義理の弟にあたるレオンだった。

「何しに来た」

すばやくマーキーが反応する。無愛想に腕組みをして、きつい目元を弟に向けた。鋭い視線に射抜かれたレオンは、口の中で何事かもごもご繰り返し、はつきりとしたコトバにはならない。

「用がないのなら、消えろ」

びくり、とレオンの肩がはね上がる。クロエを証人として、自分とマーキーとを反省室送りにしたときとはまるで別人のようだと、ミシエルは首をかしげた。

「レオン、何か困ったことでもあるの」

思わず聞いてから、「しまった」と口元を覆う。ちろりとうかがうと、やはりマーキーは、不機嫌を通り越した冷たい笑みを浮かべていた。

「そんな顔しないでよう」

時間のむだとばかりに、マーキーはさっさと自分の荷物を引つかんだ。

「ちょっと、まさか帰るの？ 練習はどうするのよ」

マーキーは振り返り、「あほ王子に聞けばいい」とフラミンゴ男をアゴで指し示した。オレンジ色の日の光をほおに受けたフラミンゴ男の目が、ついつと細くなる。

「あ？」

チツという短い舌打ちが、聞こえた。

片ほおを奇妙につり上げたままのマーキーは肩先でレオンを押しつける、足早に螺旋階段に消えていく。

「ああ……」

——うまくいかないことばかり。

ミシエルは、ため息を取り落とした。

「すみません」レオンが目を伏せる。「ぼく、その……もう帰りますから」

いいのよ、とミシエルは首を振った。

「お姉さんに話があるんでしょ？ このまま見学していったらいいよ。でも、これだけは言わせて？」

そのままレオンの前に進み出て、胸元に指先を押し当てる。

「マーキーとはちゃんと仲直りしたほうがいいと思う」

自分で口にしながらも、だめだろうという気持ちのほうが強い。

「だめでしょうね」半笑いのレオンが、兄とよく似たしぐさで口元を引きつらせた。

「だめだろうナ」

ぬらりとサングラスを外したフラミンゴ男が、ぼりぼり額をかく。

「だめ、なのでしょね」

手早く焼き菓子の包みをしまいながら、クロエも同調した。

「なによ、みんなして」

半泣きの声音で反発したミシエルは、八つ当たりのようにレオンの肩先を乱暴に引き寄せる。

「レオンだって、お兄さんのこと嫌いじゃないんでしょう？ あんなふうにケンカを売ったのはなぜ？ どういうつもりで、マーキーの嫌がらせをしているのよ。あんなことしたら、怒るのはあたりまえだと思うよ？」

レオンは顔をあげない。代わりに、クロエがそろそろとミシエルをのぞき込んだ。

「あの……レオンは家ではいつも、マーキーさんの話ばかりしているのですよ」

ああ、とミシエルは口を開けた。

「そうだったの」

幼なじみのミシエルが見まがうほどにふたりがよく似ているのは、彼らが同じ髪型をしているからだ。しぐさ、話しぶり、それらレオンをかたどるすべてのものが、マーキーと瓜二つ。

外見ばかりか、そういった後天的なことは本人の意思と関係なく現れるものではない。

「うん。よく分かった」

「何が、ですか」不安げにレオンが口角をゆがめた。

「いいの、いいの。もう分かったから、どうすればいいのか」

ミシエルはちろりと小さく舌を突き出し、思案顔を作った。

「……レオン！」

「はい？」

「今から、やってもらいたいことがあるの」

絶対に嫌とは言わせない勢いで、ミシエルは含み笑う。

「あんたに、サポート役を命じます。いい？ あんたの役目は、あたしたち特務のメンバーといっしょに劇を成功させること」

た。
レオンは、マーキーの消えた螺旋階段に、ついつと視線を滑らせ

29 ばらばらのバラ(単品)

待ちに待った学園祭は、理事長の舌ったらずの演説で始まった。

だれも聞いていないのに気づいていないのか、それとも分かっているのに嫌がらせをしているのか、理事長はやけに長々と話し続けた。「少し模擬店の巡回をしてくるよ」

そう言い訳してマーキーが一般客の中に消えていったのが、三十分前。孫の立場では演説に付き合うしかないミシェルは、不満顔で幼なじみを見送った。

「もうっ、何が優等生よう」

本物の優等生は一時間だろうが二時間だろうが、健気に聞き続けるに違いない。

「あとで、おじい様に報告ね」

理事長は最後に能面のような笑みを顔じゅうにたたえ、「それは今日は楽しんでください」とお決まりのセリフでしめた。ようやく開放された生徒らは、あざやかに彩色された模擬店の看板の元へと駆け出していく。

グループごとに趣向をこらした衣装が点在し、特務仕様のミシエルの白ブレザーも今日はそれほど目立っていない。

「おじい様……具合でも良くないのかな？」

元から、取ってつけたような笑い方をするような性分ではない。

祖父は何か不安を抱え、心配しているときこそあいつた笑い方をするのだ。胸の内にくすぶるもやもやしたものを早くマーキーにぶちまけたいミシェルは、混雑する模擬店の一面に飛び込んだ。

おもちゃのピストルを並べた射的の店を行き過ぎたとき、ふいに金網製のゴミ箱が目がいった。

「変なの」

まだ朝だというのに、ゴミ箱の中は真白の紙クズでいっぱいなのだ。今朝早く集合した特務のメンバーに、マーキーがゴミ箱の回収

を命じていたのを聞いていたミシエルは、首をひねる。そろそろと近づいて行って、何気に一枚手に取った。

――『学園ノドコカニ爆弾ヲ仕掛ケタ』

「はぁ？」

新聞の切り抜きを貼り付ける、といった古風なコラージュで宣言されたその警告文の最後には、真っ赤なバラが描かれていた。

「ナニコレ！」

すっとんきょうなミシエルの大声に、射的で遊んでいたふたり組が動きを止める。

「いたずら？ ……にしては、妙に手が込んでるわね」

ゴミ箱に入れられたすべての紙くずが、同じ警告文なのだ。ひとつひとつ丁寧にはり付けられた、悪意あるコラージュ。目を細めたくなるような、繊細なバラの絵。

ミシエルはコブシを握る。

「大変だわ！　もしかして、おじい様のところにもこれが……？」
何かの時間かせぎのための長演説だったのではないか、そう思っ
てしまうともうそれしか考えられない。急いできびすを返すと、ミ
シエルは二段飛びに階段を駆け上った。

理事長室の前に、「不合理主義の憂うつ」の扉をたたいていると、
同じ形式の警告文を手の方々から特務のメンバーが集まってきた。

「みんなも見つけたのね？」

カン・ゴン・ボン♪

扉が開くと、そう白な顔の教師陣が皆を出迎えた。

「ミシエルや……」

一番奥で歩き回っていた理事長は、孫の姿を見つけるや安堵した
ように破顔する。

「先生たちが大集合してるってことは……これ、本物なんだ」

手の中の警告文を強く握り締め、ミシエルは肩を怒らせた。

「それは？ ……もしや、これと同じではあるまいな」

祖父はデスクの引き出しを開け、分厚い封筒を取り出す。

「今朝、ここに置いてあるのを見つけたのだ」

祖父から受け取った封筒にはミシエルの見つけた文面のほかに、もうひとつ別のコラーージュがあった。

「邪魔スルヤツハ消ス。……って、なによ、これだけ？ もっとほかに要求はないの？ 身代金とか、身代金とか、身代金とか」

口をぽかりと開けたまま、理事長はミシエルを見やっている。

「いやいやいやいや、ちよつと待ちなヨ」

変なこと言ったかしらとばかりに首をひねるミシエルに、今まで後ろにひかえていたフラミンゴ男こと、マイケル・ガーツが声をかける。

「あのね、ミシエルちゃん。身代金ってのは誘拐された人がいないと成り立たないのヨ。これは、ただの学園を標的にした爆弾テロ？

まあ、いたずらの可能性も否定できないけどねー」

ううむ、と理事長は唇をかみ締めている。妙にうきうき「どうします？」と、ほかの教師陣に声をかけているフラミンゴ男を見つめ、ミシエルはそつと胸の内の疑問を口にする。

「あんたじゃないよね？」

理事長室にひしめいていたすべての人間の動きが、止まる。

口にくそ出さなかったが皆、心のどこかで考えていたのだろう。

「ヒドイねえ。俺様ってば、犯人だと思われてるの？」

まさか。いいえ。そんなあ。

口々に笑みを見せる教師陣の態度を見る限り、第一容疑者は目の前にいる。ミシエルは入り口付近にたむろしている特務のメンバーを振り仰いだ。

「ねえ、マーカーはまだ来ていないの？」

「あの……」答えたのは、クロエだった。

彼女は言いにくそうに左手を口元にやってもじもじすると、「マーカーさん、さっきからだれも姿を見ていないんです」と、小さくつぶやいた。

30嵐の中に置いてきた☆☆☆

ひとつだけ、またたきをした。

「それって、行方不明ってことなの？ マーキーが？」

こくりとうなづくクロエをまじまじ見つめ、ミシエルは反撃に転じる。

「でも、さっきまであたし、いっしょにいたわ。ステージからは死角になる柱に寄りかかって演説を聞いていたの。でも、あんまり長いから……ええっと、えと、模擬店のほうが心配だからって……途中で巡回に出かけたの」

理事長とフラミンゴ男が顔を見合わせている。

「ソレは、いつのことだ？」

またたきもせずに聞いてくるフラミンゴ男の様子があまりにも真剣に思えて、ミシエルは目をしばたせた。

「……やだ。なんなの、その目。まるでマーキーに何かあったみたいじゃない」

白ブレザーを脱ぎ捨て、ミシエルは肩に担いだ。

「ミシエルちゃん」

クロエがミシエルの手を握る。細かく震える指が、優しくミシエルの髪をなでさすった。

「大丈夫よ。彼は強いわ。もし何かあったとしても……」

「やめて。そんなこと、あるわけない。だって、まだこれが本物って決まったわけじゃないでしょう？ もし仮に、仮によ？ 本当に学園に爆弾が仕掛けてあったとしても、それがどうして誘拐事件につながるっていうの」

「邪魔スル奴ヲ消ス」

フラミンゴ男が、ぽつりと言った。

「何よ、それ」

「さっきの警告文だよ。もしかしたら、あの優等生君は先んじて異

変に気づき、ひとりで犯人を追ったのかも知れないって思ってたね。彼ならあり得る。もしくは彼自身が……」

そのままことばをにこし、フラミンゴ男は宙を見据えた。

中止にしようか、と居並ぶ教師陣の中から声が上がる。

「すぐに生徒を集め、安全を確保する必要があるのでは？」

ミシエルはさすがの目で、理事長を振り仰いだ。

「……もちろんだ」ゆったりとうなずいて孫娘を安心させると、理事長はマーヴェラス先生に学園祭の一時中断を放送するよう言いつける。

「放送を聞いたら、マーキー君も姿を見せるはずだ。そのあと皆で爆弾を探し、何もないことが分かったら学園祭を再開させよう。いいね？」

声には出さず、教師陣は目視でうなずき合った。

「おじい様、もちろんあたしたち特務もいっしょに爆弾を探すわ。こういうときに魔法って、便利だと思うの」

「頼んだぞ、ミシエルや。わしは警察に協力を要請しようと思う」

真剣な眼差しの祖父の後ろで、フラミンゴ男が震えるクロエの肩に腕を回したのが見えた。いつになく優しいような声で励ましているのが、聞こえる。

（――マーキーい……）

ミシエルはだれもいない空間を見つめ、小さなため息を取り落とした。

「大変よう、これを見て！」

そこに、放送室へ向かったはずのマーヴェラス先生が香水の匂いを振りまいて戻ってくる。その野球のグローブのような大振りの手に握られていたのは、新たな警告文だった。

「学園祭ノ中止ハ爆発ノ始マリ」

「これはどこで？」

フラミンゴ男の冷や汗は、本物だ。

「非常ベルよ、すぐ前の廊下の！ 防護カバーに結び付けられてい

たの！」

答えるマーヴェラス先生も、いつもより声が低い。

「それって、つまり……」ミシエルは目を細め、開け放したままのドアをにらんだ。

「犯人はここで、あたしたちの話聞いていたってワケね？」

分かった、とミシエルは唇をかむ。

「お願いがあります、おじい様。今だけ、あたしに杖を返して欲しいの。もちろん、今のあたしは謹慎中の身よ。十分反省しているし、状況を理解している。『コレ』が本当なのかいたずらなのか、まだ分からないけど……でもあたしは魔法学科の特務としてやるべきことをやらなくちゃって、思う」

祖父はゆっくりと、口元をゆるませた。

「よかろう。ミシエル・マイヤー、杖を返そう」

「ありがとう！……ごじますっ！」

きりりと唇を引き結び、ミシエルは声を張った。

「先生たちは、生徒の誘導と点呼を。あたしたちは学園内の見回りと……犯人の追跡を」

「はい！」

白ブレザーの一団が、ミシエルの前でキョツケをする。

「行くわよ」祖父から受け取った琥珀色の指輪をはめながら、ミシエルはフラミンゴ男ことマイケル・ガーツをにらみ据えた。

「あんたはもちろん、今は特務として来てもらうわ」

「了解」

片まゆを器用に持ち上げ、フラミンゴ男は黒々としたひとみに光をたたえた。

「ガーツ先輩、ミシエルちゃん！これを……」

先頭に立って廊下に出ていたクロエが、何かの紙片を手に駆け戻ってくる。

「爆弾ハ始動シタ。人質ハ嵐ノ中ニ置イテキタ」
ちっ、とフラミンゴ男が舌打ちした。

「三枚目か。まったく、面白くもねえ冗談だナ」

いいわ、とミシエルは小さくつぶやく。

「後悔させてあげる。あたしたちにケンカを売ったこと」

ミシエルはまぶたを閉じて、そっと指輪に唇を押し当てた。

31 ばらを一輪どうですか＜＜

特設カラオケ会場の観覧席には、いまだ三人の生徒がたむろしている。

「すぐに体育館に行つて！」

「え、なんでよ？」

きよとりと顔を見合わせた面々は、口をとがらせてミシエルを一瞥した。

「ええつと、そのう……なんでもいいから！」

冷たい視線が、ミシエルを射抜く。

こんなとき。無愛想で無遠慮で威圧的な暴君マーキーがいれば、こんなむだな押し問答はなかったに違いない。

うまい言い訳が見つからないミシエルは、とにかく早く早くと急きたてる。

「ちっ、なんだよ。せっかくの学園祭なのになー」

「いっつもさ、唐突なんだよ。まったく」

普通科のブレザー姿。おそらく三年生。細面のキツネ顔とゴリラのような体躯の男が、ふたり。それに寄り添うようにもたれかかる、茶色の髪の子。

「やあねえ、これだから特務って」

去り際にぽつりと放たれたコトバが、ミシエルの胸に突き刺さった。ぎゅうう、と唇をかみ締めて、それでもなんとか笑みを作る。

「ごめん。あの、ごめんね……？」

その後ろ姿に向けて、ミシエルはそつと声をかけた。彼らはなおも、口々に何事か言い合いながらぐずぐず歩いていく。さらに唇をかんだ。

「なあ？」

背後に気配がすると気づいたのと同時に、ミシエルの上に声が降る。

「あいつら。なんつうか、その……むかつくネ？」

ふてぶてしい声音が、ミシエルの名前を呼ぶ。

「なんだよなんだよ、なんつう顔してんの。ミシエルちゃん？」

とがったサングラスの奥の目が、ふにゆりと細くなったのが見え
た気がした。

「なによ、フラミンゴのくせに」

「なによとは、なにヨ？」

ミシエルのコトバをオウム返しに繰り返し、フラミンゴ男はだ
だら歩いていく三人に声を投げた。

「うおーい、その人たち？ 理事長が体育館で特別講演を始め
るんだってサ。これを聞き逃した者には一週間、反省室のタイル張り
替えの奉仕活動を言いつけるって話ヨ？」

急にしゃきしゃき駆けていくのを見送って、フラミンゴ男はか
ら笑い上げる。

「優等生君は見つかった？ ……って、なんでそんな顔を……泣く
のか？ 泣くのか？ ちょっと待ってって、待て！ うおおおい！」

あたふたポケットというポケットを探り、最後にヨレヨレになっ
たハンドタオルを取り出した。

「使う？」

「……きたない」

こちらこちら、とフラミンゴ男が笑う。つられたミシエルも、わず
かに口元を引きつらせた。

「あたしね」

「おう？」

ひよい、と腰をかがめたフラミンゴ男は、ゆったりとミシエルの
目線に合わせてくる。

「……気づいたの。マーキーがいないとあたし、だめなんだって」
そうかあ、と柔らかなコトバが返った。

「さっきのやつらだってね、マーキーがいたらスムーズに誘導でき
たの。マーキーが声をかければ、どんなやつだって言うこと聞くわ。

あんなやつら……」

「でもサ」フラミング男は背すじを伸ばし、ぐいっと空を仰ぐ。

「ミシエルちゃんだって、きちんとやれてたけどネ」

まじまじと見上げたら、フラミング男ことマイケル・ガーツは慌てたように背を向けた。

「だってさ、なんつうの？ 学園に爆弾が仕掛けられたから体育館に避難なんて言ったら、パニックになるでショ。まずは生徒の安全を最優先に確保し、自分の感情をこらえ、冷静に判断する。完璧じゃないですか、ねえ？」

チャイム替わりのオルゴールが鳴った。

うららかな日差しの下。フラミング男の長い影を見つめながら、ミシエルは耳慣れた音が鳴り終わるのを待っていた。

「……あれ？」ミシエルは顔を上げる。「ちよっと変じゃない？」

「何がデスカー」

膝の屈伸運動をしながら、フラミング男が気のない返事をする。

「変よ、やっぱり変よ。今日は学園祭でしょ？ 自動チャイムは、止めてあるの。どうしてわざわざ手動で鳴らしたのかしら」

「そりゃあ、鳴らす必要があったから……」

フラミング男は耳にはめた赤いピアスに、そっと手を伸ばした。

「じゃあ、だれが鳴らしたの？」

目が合う。サングラスを額に引き上げ、フラミング男はぐいと校舎をにらみ据える。

「とりあえず、行ってみるかい？」

学園の職員室に、それはあった。チャイムを切り替えるには、スイッチひとつ押せばいいのだということを、ミシエルは初めて知った。

「本当に切り替えられてるわ……って、ナニコレ！」

高い位置に設置された、配電盤のような四角いケース。そこに、またもや何かの紙片が結び付けられてある。

——『バラヲ一輪ドウデスカ』
そこには、繊細なばらの絵が添えられてあった。

32 穴倉十サンダーバードⅡ∞

油断なく辺りに注意を払いながら、ミシエルは警告文に腕を伸ばした。おどけたしぐさでそれを見守るフラミンゴ男は、「おやおや」と大げさなつぶやきをもらす。

「おいてあるね。こんなところに。本物のばらが」

職員室で異彩を放つマーヴェラス先生の紫色の机の上に、真紅のばらが置かれていた。

「待って、触らないほうがいいわ。動かしたら爆発するとか、トラップがあるかも……」

「おいおいおい」声のトーンをわずかに上げながら、フラミンゴ男はすでにつまみ上げていたばらをミシエルに向かって投げつけてくる。

「いやああ！」それをバレーボールさながらに打ち返し、ミシエルは悲鳴を上げた。ばらは、ひゆるひゆる弧を描き、フラミンゴ男の胸元に返っていった。

「うわあああああああつ……あ？」

何もない。

ほおを朱色に染めたフラミンゴ男は、ごほんとセキ払いをしてミシエルに背を向けた。あえて何も口にはせず、ミシエルもあらぬ方角に視線を飛ばして黙り込む。

「あ」窓から広場を見渡すと、まだ生徒が歩いているのが見えた。「れ？」

「あれは……さっきのヤツラだよねええ？」

即席お化け屋敷の入り口で笑い合っているのは、先ほどの三人組ではないか。

最悪ね、とミシエルは琥珀色の指輪をきちりとほめ直す。

「ちよつとあたし、誘導してくる」

「いっしょに行くか？」

「平気よ、ひとりでも」ミシエルが答えると、フラミンゴ男は氣ままに職員室の散策を始めた。ちろりと目の端でそれを追い、ミシエルはひとり広場へと続くドアを押す。

「ちよつとあなたたち！ 体育館に集合しなさいって……さつき……」

ミシエルの唇が止まった。三人組の元に、白い服を着た男が駆け寄っていくのが見えたのだ。遠目で判然としないが、振り上げた腕に何か紙袋のようなものを抱えている。

「だれ？」

ミシエルは目を凝らす。白い服の男は、三人組に向かって激しい口調でのしり始めた。狐面の男が後ずさりし、ゴリラのような体躯の男と茶色の髪の方が、話に割り込んで加勢する。

それに応じて、白い服の男は再び腕を振り上げた。きらりと何かが光って、ミシエルの目をくらませる。かろうじて片目を細めて見やった視界の中で、対峙するように向かい合っていた三人組が地面に投げ飛ばされて悲鳴を上げるのが見えた。

——魔法？

閃光がまたたく。黒い衝撃波が三人組を乗り越えて、迫ってきた。慌てたミシエルは指先を前方に突き出し、早口で防御の術を唱える。「風と精霊の名において、私ミシエルが唱えよう。いたずらゴブリン兄弟、悪しき者の刃を防げ！」

ところが。衝撃波の前に、ゴブリンの壁は現れない。

「何？ どうして？」琥珀色の指輪は、凧いだ海のように静まり返っている。

「おい、何を突っ立っているんだ……よつと！」

声の主は強い力でミシエルの腕を引き、立て続けに呪文を唱えた。「地と精霊の名において、俺様マイケルが唱えるぜ？ 愛しのハニィ、おまえのすべての力を使い、ここに防御壁を作りなさい」

黒々とした波の刃がミシエルのほおをかすめ、消えた。安堵するのと共に、急激に腹が立ってくる。

「なんなのよ、あいつ。信じられない！ 魔法学科？ 無防備な普通科の生徒に向けて、あんな強力な術を放つなんて！」

息を整え、ミシエルは後ろを向いたままの男をにらみ据えた。黒い短髪。白いと思った服は、ブレザーの制服姿だ。

「あれ？」嫌な予感がミシエルの心を支配する。まさか、とミシエルは男の広い背中を見やった。「……マーキー……？」

彼ならば、違反者を取り締まっていたとしても不思議ではない。

「でも」

いまだ起き上がれずにあえいでいる三人組に視線を落とし、ミシエルは唇をかむ。白い服の男が、再び腕を振り上げた。

ばちばちと不穏な音をとどろかせ、雷の竜騎士の刃が走る。

「だめよ！」ミシエルは叫んだ。青白い光の束が四方に散って、大気を揺らした。

ごきゅり、と息をのむ。衝撃波のあと、悲鳴はすぐに途切れた。

とっさに目を閉じたミシエルは、何か重たいものがアスファルトにたたき付けられる音を、聞いた。

「だめ……だめ、だめよう」

琥珀の指輪が光った。ミシエルの意思とは関係なく、何かの魔法の発動が始まったのだ。

「ちよっと、何これ……」

慌てて押さえ込んだ指先が、熱い。体じゅう駆け抜けるびりりとした感覚を振り払うかのように、首を振る。

「すげえな。何をどうすると、そんなにばちばちするのサ」

フラミンゴ男の声が背後から聞こえたが、振り向くことができない。琥珀の指輪は、次第に熱を増し、周囲に静電気をまき散らしている。

「止められないのよ！」

ミシエルが声を上げた途端、指輪から激しい雷撃が飛び出した。

それは、まるで一羽の鳥だ。光と雷撃をまとったまばゆい鳥が、天空めがけて一陣に駆け上がっていく。

「きゃあああああ」

衝撃で、後方にはね飛ばされる。すぐに立ち上がろうともがいて
いると、白い服の男が即席お化け屋敷の中に入っていくのが見えた。
逃がさないわ、とミシエルは唇をかむ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1356n/>

聖☆マイヤー・ハイスクール魔法学科の始末書。

2011年10月20日00時09分発行